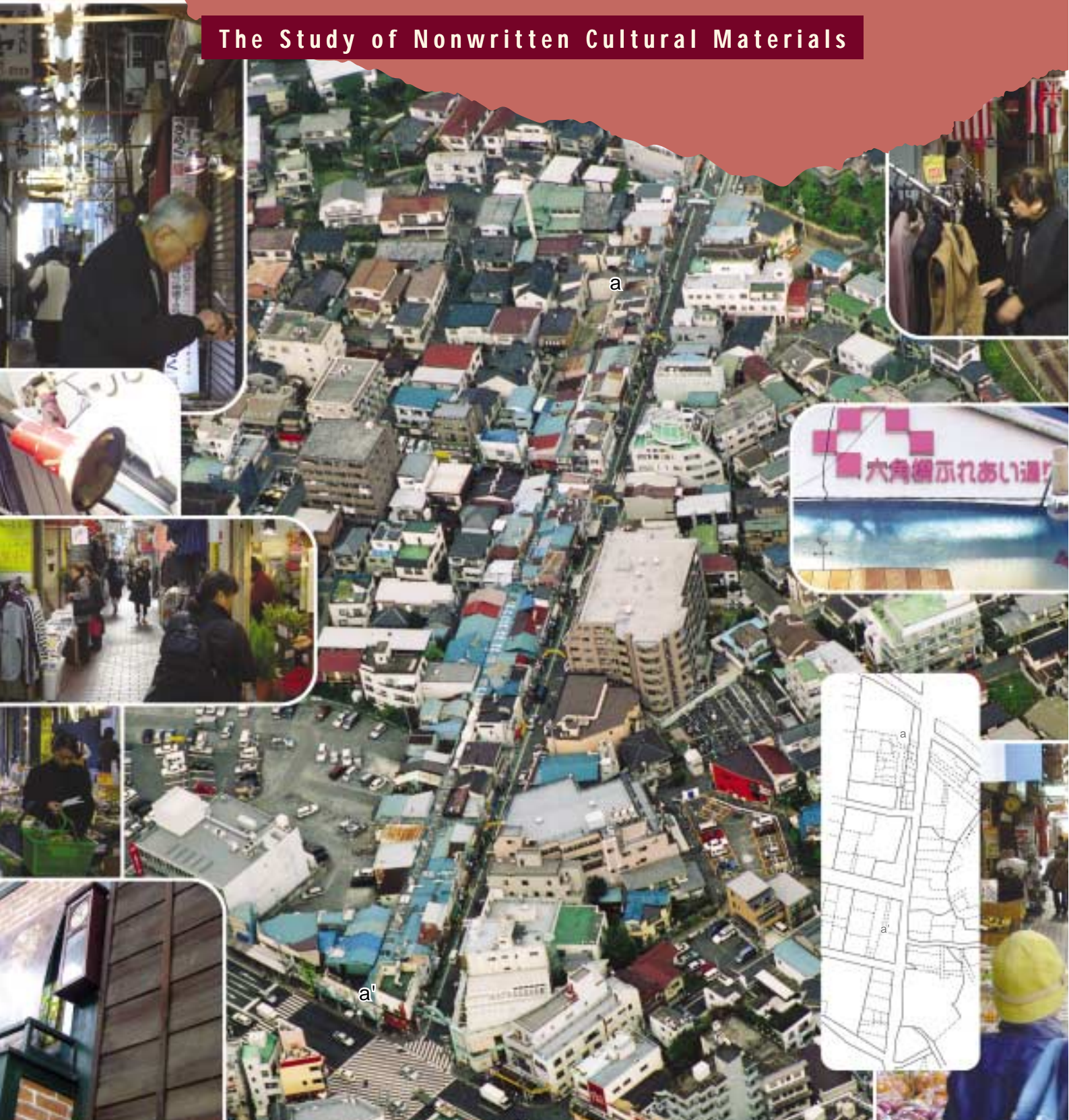


非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials



非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials

News Letter **2006.12** No.14 CONTENTS

展示を考える2 What Is a Museum Exhibition?

- 博物館と体験学習 3
Providing More Attractive Experiences at Museums
佐々木 長生 SASAKI Takeo
- 「昔の暮らし」の展示すること 5
The Making of New Exhibitions of Past Cultures
青木 俊也 AOKI Toshiya

第2回国際シンポジウム 開催レポート Report on the Second International Symposium

- 第2回国際シンポジウムを振り返って 8
大里 浩秋 OSATO Hiroaki
- プログラムスケジュール 9
- 第2回国際シンポジウムを「総括」する 10
中村 政則 NAKAMURA Masanori
- 第2回国際シンポジウムを終えて 13
大西 万知子 ONISHI Machiko
- 海外提携研究機関代表者懇談会 13

只見町・神奈川大学COE共催 シンポジウム 民具は世界を結ぶ 人と自然を結ぶわざ Material Culture of a Mountain Village

- はじめに 14
佐野 賢治 SANO Kenji

- プログラムスケジュール 14
- 只見町の生業と民具 雪・山・川をつくる世界 15
佐々木 長生 SASAKI Takeo
- 中国農具研究の視座 16
農業考古学から民具研究へ
周星 ZHOU Xing
- 犁の比較民具学 東アジアの民族移動 17
河野 通明 KONO Michiaki
- 生存からサバイバル文化へ 18
民具に見る継承の役割
スチュアート ヘンリ Henry STEWART
- コラム Column 19
色彩認識の象徴化 京劇の臉譜の表すもの
劉 湯冰 LIU Keping
- フィールドノート *Field Note*
- 中国東北部、旧満洲の旧神社跡地調査報告 20
堀内 寛晃 HORIUCHI Hiroaki
- 1班「『東アジア生活絵引』編纂」公開研究会報告 22
軒端の鞠 『絵巻物による日本常民生活絵引』のひとこま
藤原 重雄 FUJIWARA Shigeo
- コラム Column 24
東京の都市景観についての一考察
陳 穎恩 CHAN Wing Yan
- コラム Column 25
少女の絵姿から見た日本の「東西融合」
戴 嵐 DAI Lan
- 主な研究活動 26
- 3班「景観の時系列的研究」公開研究会報告 29
韓国の多島海を写した「澁澤写真」について
田 鳳熙 JEON Bong Hee
- 受贈資料一覧 30
- 彙報 31
- Information 32



表紙写真説明

六角橋商店街（横浜市神奈川区）
神奈川大学に関わる人たちにとっては、もっとも馴染みのあるエリア、六角橋商店街の空からの景観。この商店街の一角は終戦直後のヤミ市からそのまま発展したと言われている。空から見てみると、たしかに一本の細い道（写真中a a'）をはさみ両側に店がつづく細長い長方形の地域は、周囲とどこかその趣を異にしたブロックとなっている。現在アーケードが設けられ、細い道はきれいに舗装されているが、15年ほど前まではほとんどが土の道で、その中央に溝が一本走り、そこにフタがしてあった記憶がある。写真右下に示したのは、その地割図（神奈川区役所蔵の図をトレース）道に沿って短冊状に店割がつづく実際の景観と違い、かなり不規則な所有や分割のあり方がうかがえる。図中a、a'の筋が写真a a'と同じく細い道になるのだが、図でわかるように同一地目で貫通しているわけではない。見かけの景観とは違う形の占有や地目変更のあゆみがあるのだろう。2006年10月撮影。
(香月 洋一郎)

展示を考える2

What Is a Museum Exhibition?

前号 (No,13) に引き続いて、来年度の展示にむけて活動中の作業班のメンバーの方々からの、展示への展望や提言をご紹介します。

博物館と体験学習

佐々木 長生 (福島県立博物館 専門学芸員 / 共同研究員)

Providing More Attractive Experiences at Museums

SASAKI Takeo

博物館における体験学習には、三つの方法があると思う。一つ目は「観る体験」、二つ目は「さわる体験」、三つ目は「学ぶ体験」である。これらの体験には、それぞれ観る人の年代と職業などの立場がある。博物館に勤務する私の立場から、これらの体験学習を見てみたい。

観る体験

観る体験は、主に幼児期や小学校時代である場合が多い。これは最初に博物館に行った体験である。見学・催し物などさまざまな機会がある。最初の博物館に対する印象が、その人物の博物館に対する印象を決めてしまうということもある。

福島県立博物館では、春の企画展「馬と人の年代記」を開催し、その関連行事として友の会の主催により、6月8日に周防猿回し会による「猿まわし」の公演を行った。午前・午後の2回の公演を行い、午前の部では博物館近隣の幼稚園児約250名を招待した。公演は2匹の猿により、竹馬乗りやジャンプなど周防猿回しの伝統芸である。一匹のベテラン的存在の猿は、一回で見事に芸をこなすが、もう一匹の小猿はなかなか芸を成功させられない。しかし小猿は一生懸命に芸に挑んでいる。いつしか園児たちからは「がんばれ、がんばれ」という熱い声援が湧きあがっていた。見事芸を成功させると、拍手と喜びの声が会場いっぱいに広がった。猿使いの人と猿、そして園児たちが一体となって会場は熱気に包まれていた。

私はこの光景を見て、園児たちが最初に見た猿回しの芸、これは生涯忘れられない体験になったものと見

写真1



猿まわしに集う園児たち

写真2



周防の猿まわし公演 (梯子乗り)



た。この感動の体験が博物館であったこと、猿まわしを見たという体験と感動、この時点では博物館の存在は薄くても、250人の園児たちの僅かでも博物館について関心を持つことになれば、この企画は成功と思った。その結果は、将来に期待したい。幼稚園児たちにとって博物館の展示は、理解するには多くの困難がある。しかしこのような博物館に接する機会やイベントを設けることも、これからの博物館の使命であろうと考えさせられた。

(写真1、2)

さわる体験

博物館の展示は触ることができず、静かに観るとするのが常識である。近年はハンズオンコーナーとして、レプリカや体験用の資料を準備し、触れるようにしている博物館が多い。しかし、観覧者のなかにはこれで十分納



福島県立博物館体験学習室ハンズオンコーナー
「化石にさわってみよう」
化石にさわって見る小学生たち

得する人は少ないのが現状である。福島県立博物館では、体験学習室にハンズオンコーナーを設け、自然・考古・美術・民俗などの各分野が担当している。民俗の場合は、雪国の履き物・かぶり物を準備し、その着用にあたっては、展示解説員が対応している。

体験学習室には、昔のおもちゃの遊び、古代の衣装や旅人の衣装の体験、鎧兜の着用などの体験ができるようになっている。また昔語りや紙芝居・機織りなどの実演による体験学習なども企画している。そのほか学芸員や展示解説員による縄文土器作り、おもちゃ作りなどの実技講座などを企画し、展示資料と同じものを、作ったりする体験学習を行っている。(写真3)

学ぶ体験

学芸員が研究を行うにあたって、体験は必要であると実感する。たとえば草鞋や籠を研究するにも、その知識はあるもののその製作技術は無い。製作方法など聞き取りでは詳細に記述されているが、学芸員は作ることができない。博物館においては、草鞋作りなどの実技講座が企画される。しかし、講師は外部の技術保持者に依頼せざるを得ない。こうした技術保持者も年々高齢になり、いつかは依頼も不可能となる。学芸員は、こうした事情に鑑み学芸員自らが技術体得に努めねばならぬと、私の経験から痛感している。技術を体得することにより、また新たな研究に発展することも期待できよう。私は、20年前に猪苗代湖畔の会津民俗館に勤務していた。冬期間は、約2メートルの積雪に悩まされながら、毎朝館内の除雪作業から1日の仕事が始まった。時には屋根の雪下ろしも行った。このとき、カンジキの装着やコウシキと呼ばれる除雪用具の使用方法について学んだ。こうした自らの体験が会津地方のカンジキや除雪用具の研究には、大変有効であった。次いで、その製作方法なども使用体験ある私にとっては、どこに力が加わるのかなど、聞き取りの注意も注がれた。こうしたことも学芸員にとっては、大切な「学ぶ体験」でなかろうかと実感する。

また学芸員と研究にとって大切と思われる体験につい

Formerly, in Japan, many museums were places of serious education.

There sat precious materials and plates that showed magnificent explanations;
the visitors had to view them silently. The air was serious and grand.

The atmosphere of this place of education was filled with dignity from top to bottom.

Only a little amusement was permitted at places of education. For some people,
the word museum is synonymous with boredom.

These past 50 years, museums have been trying to completely change this.

Museums have, through trial and error, become more attractive and enjoyable.

て、私の経験からもう一つ紹介したい。それは、昭和48年夏に会津民俗館内に南会津地方の古民家を移築復元したときである。この民家は、「旧馬場家住宅」で国の重要文化財に指定され、保存公開されている、私はこの民家の解体から復元にいたる作業に携わり、大工や屋根葺き、左官などの職人の手伝いを行いながら、その伝統技術をつぶさに観察することができた。いっしょに汗を流しながらの観察と聞き書きは、私にとり何よりの調査となった。そのなかで土間のタタキ製作は、粘土に塩(ニガリ)をまぜ、これを槌でたたきながら固める作業は、私の仕事となった。土間は二ワと呼ばれその家の顔といわれ、

農作業や夜割仕事の大切な場であった。この製作を担当し、できあがったときの喜びは今でも忘れられない。こうした体験が、後の民家研究において大いに参考となった。

以上、私の経験から博物館における体験学習について紹介した。民俗学を専門にする私にとって、民俗技術などの体験学習は今後の研究にとっても重要であることを痛感しており、その体得を目指している。まさに、非文字資料としての民俗技術の体得である。学芸員自らこうした体験を生かした博物館活動を行っていく必要を感じている。

「昔のくらし」の展示すること

青木 俊也(松戸市立博物館 学芸員/COE教員)

The Making of New Exhibitions of Past Cultures

AOKI Toshiya

はじめに

このニュースレターの6号で「展示における昔を考える」と題して、小学校4年生の社会科のカリキュラムに関連させた学習資料展、いわゆる「昔のくらし」展において、どのような時代を展示しているのかを考えてみた。この展示は、今日では失われてしまった生活の知恵や技を生かして自然環境を利用していたくらしを出発点に、現在に至る身近な生活の歴史を対象にしている。そのなかで表現される「昔のくらし」が、地域の古老や祖父母世代が経験した戦前のくらしから、父母世代が経験した戦後のくらしへと時代設定の比重を移していることを述べた。そこには、この十数年間「昔のくらし」展が開催され続けている状況のなかで、子どもに昔を伝える身近な大人の生活経験の推移が要因となっていることを考えた。このような生活経験の変化は、歴史系博物館において戦後生活の資料を収集対象にし、その結果、家電製品を備えた昔のくらしを表した戦後生活再現展示という新たな動きをつくり出している。

それでは、博物館において展示されたテレビが置かれていなかった戦後生活以前の「昔のくらし」は、どのような時代の生活を表しているのであろうか。

野外博物館における民家の生活再現展示

さて、「昔のくらし」を再現した展示における具体例の一つとして、野外博物館における民家の生活再現展示を挙げることができよう。この写真(1、2)は、スウェーデ

ンのストックホルムにある1891年に設立された世界最初の野外民家博物館であるスカンセンで展示されたくらし(兵士の家)を写している。伝統的な家屋を中心にその屋敷、耕地、家畜なども含んだ生活環境と、そこでの生活者に扮したスタッフの活動を混じえた生活の姿が再現されている。スカンセンの生活再現展示は、リビングヒストリーミュージアムとして多くの影響を他国の博物館に与えたと指摘されてきている。

この国の本格的な野外民家博物館は、戦前において日本民族博物館の野外展観が計画され、今和次郎によってスカンセンを模した鳥瞰図が作成されたがその時にはつくれず、戦後になってから日本民家集落博物館などによって実現されたことが知られている。現在、40数館を数える野外民家博物館のなかで、実際規模の一軒の家屋敷として、主(母)屋、付属屋を配置した屋敷地、さらに周辺の耕地を揃えた生活環境を再現した館は、1986年に開館した千葉県立房総のむらまで待たなければならなかったと私は考えている。それまでの一般的な傾向としては、各館で独自の生活環境の整備を行っていること、移築する民家の位置する散村と集村の屋敷地の違いを踏まえても、屋敷地全体ではなく、主屋を単独で移築していることが多かったのは確かであろう。

それでは、なぜ、主家が単独で移築されたのだろうか。もちろん、各館の敷地面積、予算規模などの経済的な要因による影響が大きいと考えられ、その理由は個別に検



At museums, the restoration of exhibitions, for example houses, huts and so on,
is not to make them What they were , exactly.
There is a clean and strong intention at each museum,
and it depends on how we define the term restore and what it means to museums.
So, we can imagine various ways to try to make exhibits What they were .

討しなければならない。しかし、その基礎的な作業として各館の展示に共通して影響を与えた民家研究面における志向ともいうべき事柄について考えてみたい。

戦後初めての本格的な野外民家博物館として1960年に開館した日本民家集落博物館は、飛騨白川の合掌造りの民家が豊中市に移築されたことを契機として、「厳密な調査に基づき学術的に復原する」という方針から全国各地から存続の危機にある民家を移築している。この方針の意味するところは、民家の現状から改築、増築の過程を建築当初の姿にまで追跡し、復原することにある。この博物館の開設に尽力した鳥越憲三郎は、秋山郷の民家を復原すると床が一切なくなり土間になったと述べている。民家の建築当初の姿を明らかにしたのは復原的民家研究といわれる研究方法で、大正期から始まった民俗学研究者などによる民家研究が「現状形態に注目した採集を中心と」したもので「どのような発展経路を経て現在に至ったのかなど復原的な事柄はほとんど明らかに」していないとの反省に立った戦後の民家建築史の研究成果

であった。先の主屋を優先して移築した野外民家博物館の状況は、戦後の民家研究においてその歴史的推移を明らかにするために、復原的研究方法によって各地の古い民家、主屋の建築を特定し、文化財指定などの保存措置の一つとして、野外民家博物館に移築することが進められた結果であった。そして、多くの民家が建築当初に復原されることになった。その意味で、多くの野外民家博物館は第一に民家建築の博物館としての性格を持っているといえ、それゆえに民家の生活を展示表現することは副次的な扱いを受けることもあったと考えられる。

それでは、建築当初に復原された民家の生活は、どのように再現されたのだろうか。建築当初から移築時までに行われた改築、増築は、生活の容れ物としての民家に住んだ人たちの生活の軌跡であることに対して、復原はそれを消したことを意味している。一般的には、移築する民家、その集落で使われた民具などの生活資料は、移築時などに収集し、その生活資料として展示されることが多いと考えられる。厳密に言えば、収集された民具の使用時期と民家の建築当初の時期には、ある時間差が生じている可能性があると考えられる。その時間差をなくせば、国立民族学博物館で開催された「ソウルスタイル2002」が示したように、生活ありのままに近い、冷蔵庫の中身まで密度高く生活を再現することも可能となる。つまり、民家の生活再現展示にとって、調査時点に近い時間の生活の再現展示であればあるほど、調査で得た情報を多く生かすことが可能となる。民家建築史を体現する程の野外博物館に保存された多くの民家は、近世期のいずれかの建築当初の姿に復原されていると考えられ、移築時点で調査した生活、収集した生活資料と大きく時間が隔たった復原した民家のくらしを整合することは、時代が遡るほどに生活の情報も少なくなり、調査ではつかめない想像する部分が増えるなど困難を伴う作業だと思える。

実際の民家のくらしは、各博物館によりそれぞれに表現されているが、戦後につくられた多くの野外民家博物館では、建築当初の近世期に復原された民家における生活の再現という共通した状況を迎えることになった。そ



写真1



写真2

のなかで、どのような民家の「昔の暮らし」が再現されたのかは、個別に実証していく他はない。ここでは、戦後の民家研究における建築史研究の進展によって近世期の民家の多くは建築当初の姿が復原されたこと、そのことによって、生活再現展示は大きな規定を受けることになった可能性を確認した。

おわりに

それでは、最後にこの基礎的な作業から始めている民家における生活再現展示のあり方を探ることの見通しについて、少し触れておきたい。

実際に建築当初に復原された民家の生活再現展示は、どのように行われたのだろうか。また、一方でわずかだが存在した民家を建築当初に復原せずに移築した野外民

家博物館では、どのような生活が再現されたのだろうか。先の千葉県立房総のむらにおいて、実際の野外博物館としての活動によって生活再現展示はどのような進展をみせたのだろうか。そして、それらの博物館において再現された「昔の暮らし」は、どのような年代だったのであろうか。これらの問いかけに答えることによって、民家の生活再現展示の姿をさぐりたいと思う。

さらに、先述の戦前における野外民家博物館の構想においてどのような生活が再現されようとしたのだろうか。それを確かめるすべはないのだが、今和次郎の民家研究を反映した生活再現展示をつくるとしたらどのようなものになるのかを、可能であれば想定してみたいと思う。今、このことを取り組んでいる。

常民企画展の紹介

巻物の伝える世界 職人・由緒・儀礼

会期：2006年10月25日(水)~12月15日(金)
会場：神奈川大学横浜キャンパス3号館1階
常民参考室



常民参考室の本年度の展示。第10回常民文化研究講座「職人書物 書承と口承の交錯」(2006年11月25日)と関連する形で企画された。





第2回国際シンポジウム 開催レポート

Report on the Second International Symposium



第2回国際シンポジウムを振り返って

大里 浩秋（神奈川大学大学院外国語学研究所 教授 / 事業推進担当者 / 国際シンポジウム実施委員会委員長） OSATO Hiroaki

10月28、29日は、晴れ上がったとは言えないまでも常時青空はのぞく、謂わばシンポジウム日和であった。主催者としては参加者の入りが気になるところであったが、両日ともフロアの前半分は程々に埋まってほっとした。加えて、私たちの研究に深い関心を持ってくださる方がその中に少なからずおられたことを、最後にフロアからの感想を述べていただいた際に知った。しかし、情宣活動にいくつかの課題が残ったことは確かである。神奈川大学内での、とりわけ学生を引きつけるPRを行えたのか、外部に向けての宣伝は十全だったのか等々。気の利いたポスターを作るだけでは人が集まらないのであり、日ごろの地道な研究があり、それを適宜公表して人々の関心を引き起こす活動をしていてこそ、にわかな情宣も生きるのである。心したいと思う。以下、シンポジウム実施委員会の責任者として、2点記したい。

1点は、準備過程のことである。実施委員は当初6人、途中から7人で構成した。そのうちの4人は、シンポジウムの4つのセッションの各コーディネーターとなり、パネリスト、コメンテーターの人選からその人たちへの原稿催促、更に本人もパネリストか司会役をやるという、見るからに過重な仕事を受け持つ事になった。結果は、4人ともその役割を見事にこなしたのだが、無理がなかったとはい

えないので、来年の第3回シンポに際しては、仕事の集中を避け協力の輪を広げる工夫をしてほしいと思う。準備全般について言えば、去年のシンポの経験が活かされ、かつ事務の方たちの献身を得てほぼ順調に進み、シンポ当日も問題なく運営することが出来た。これは次回にも十分に活かせることである。

もう1点は、シンポの中身についてである。今回は「非文字資料から人類文化を読み解く」というテーマのもと、日ごろ取り組んでいる課題別に研究内容の中間報告をすると同時に、それぞれに到達した地点から我々COEの共通テーマである「人類文化研究のための非文字資料の体系化」に向けた議論をしようとするものだった。それゆえ、各セッションの報告は、各課題の研究の到達点を最大限明らかにする事に努めたはずであり、コメントもそのことを踏まえてのものであり、最後の総合討論も来年度がこのプログラムの最終年度になることを念頭においての議論のかみ合わせであるはずであった。ここで私の感想を述べると、登場した皆さんは精一杯の準備をして臨んで下さり、良くも悪くも我々の共同研究の現状が素直に反映したものとなり、刺激的な内容もあったが、まだ克服しなければならない問題もかなりある、というものだった。来年のシンポが期待されるゆえんである。

第2回 COE国際シンポジウム
「図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く」

プログラムスケジュール

第1日目 10月28日(土)

開会挨拶 山火 正則(神奈川大学長)
 主催者挨拶 福田 アジオ(神奈川大学教授・COE拠点リーダー)

セッション

「非文字資料をめぐる方法論的諸問題」

- <コーディネーター>
 ・的場 昭弘(神奈川大学教授・COE事業推進担当者)
- <パネリスト>
 ・リュ アラン=マルク(フランス、リヨン第3大学教授)
 「デジタル人類学 パーチャル博物館としてのインターネット」
 ・的場 昭弘
 「非文字資料はいかに認識されるか 知覚をめぐる哲学的諸問題」
- <コメンテーター・司会>
 ・橋川 俊忠(神奈川大学教授・COE事業推進担当者)

セッション 前半

「図像のなかの暮らしと文化 日本と東アジアの近世」

- <コーディネーター> 金 貞我(神奈川大学COE教員)
- <パネリスト>
 ・福田 アジオ
 「生活絵引編纂の世界的意義」
 ・田島 佳也(神奈川大学教授・COE事業推進担当者)
 「『日本近世生活絵引』作成に向けての試み
 土屋又三郎「農業図絵」を題材にして」
 ・王 正 華(台湾、中央研究院近代史研究所助研究員)
 「17・18世紀中国における都市図、都市文化と風俗画の興隆」
 ・金 貞我
 「韓国・朝鮮編の生活絵引編纂と図像資料
 「平壤監司饗宴図」を例にして」
- <司会> 西 和夫(神奈川大学教授・COE事業推進担当者)

セッション 後半

- <コメンテーター>
 ・モストー ジョシュア(カナダ、プリティッシュコロンビア大学教授)
 ・トレーデ メラニー(ドイツ、ハイデルベルグ大学教授)

第2日目 10月29日(日)

セッション

「犁の形態比較から東アジアの民族移動に迫る」

- <コーディネーター・司会>
 ・河野 通明(神奈川大学教授・COE事業推進担当者)
- <パネリスト>
 ・渡部 武(東海大学教授)
 「中国の伝統犁とその技術移転」
 ・金 光彦(韓国、仁荷大学校名誉教授)
 「韓国の犁の形態と地域的特徴」
 ・河野 通明
 「日本の犁に見られる朝鮮系・中国系とその混血型」
- <コメンテーター>
 ・尹 紹 亭(中国、雲南大学教授)

セッション

「景観・空間編成分析における資料としての写真の可能性」

- <コーディネーター・司会>
 ・八久保 厚志(神奈川大学助教授・COE共同研究員)
- <パネリスト>
 ・藤永 豪(佐賀大学講師・2003~2005年度神奈川大学COE研究員(PD))
 「景観分析における資料としての写真の可能性」
 ・浜田 弘明(桜美林大学助教授・神奈川大学COE教員)
 「景観研究資料としての『洗濯フィルム』の今日的意義
 韓国南部を例に」
- <コメンテーター>
 ・鄭 美愛(平成国際大学非常勤講師)
 ・奥野 志偉(神戸流通科学大学教授)

総合討論

- <司会>
 ・北原 糸子(神奈川大学非常勤講師・COE事業推進担当者)
- <パネリスト>
 ・的場 昭弘 ・金 貞我 ・河野 通明 ・八久保 厚志

*前号でスケジュールをご紹介しましたが、当日実施したものに若干の変更がありました。改めて最終版をご紹介します。



会場風景



総合討論

シンポジウム初日終了後に開催された、関係者によるレセプション





第2回国際シンポジウム 開催レポート

第2回国際シンポジウムを「総括」する

中村 政則 (神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 教授 / 事業推進担当者)

NAKAMURA Masanori

1 第2回シンポの特徴

第1回と第2回シンポジウムとの違いは、開会の辞で福田アジオリーターが述べたように、神奈川大学(以下、神大と略称)COEプロジェクトの共同研究者が、これまでの研究成果を積極的に提示したことにある。第1回は、いわば外国あるいは神大以外の研究者から「教えていただく」側面が多かったが、今回はむしろ神大側が主体的・能動的に問題を提起した。したがって、報告も良かったし、コメントも良かった。これが私の全体的な印象である。以下、興味をもった諸点を中心に、感想を述べたい。

2 バーチャル・ミュージアム構想と方法論

セッションの最初の報告者リュ・アラン=マルク(フランス・リヨン第3大学)は、図書館とミュージアムが一体化したバーチャル・ミュージアム構想を提起した。これはある意味で「夢」を語ったものであるが、単なる夢ではない。それは国家や民族的な枠をこえて、「研究と教育の新段階」を創出する可能性をもつ。またリュ教授は

か」という哲学上の根本問題をプラトン・デカルトを経てフッサールからフーコーにいたる哲学史の流れを追うなかで展開した。また文字資料と非文字資料との違いは、文法的コード体系(意味を理解する文法)を持つものと持たないものとに区別できると論じた。これは総合討論で異論がでた論点であるが、後述したい。

3 図像を読む

セッションは、「図像のなかの暮らしと文化 日本と東アジアの近世」をテーマにしたものである。報告者の多くは、COE研究員であり、「我々の研究成果を提供する実践例」を示すものであった。個々の報告に立ち入る余白はないが、福田アジオと田島佳也は、「図像に何が描かれているか」に重点を置いたのに対し、金貞我と王正華(台湾、中央研究院)は「図像はどう描かれているか」、つまり美術史的方法を駆使した。いずれも苦心の跡が読み取れる報告で、面白かった。

コメンテーターのモスター・ジョシュア(ブリティッシュコロンビア大学)とトレーデ・メラニー(ハイデルベルグ大学)は、日本の絵図について、驚くほど該博な知識で興味ある論点を指摘した。Dictionary(字引)に代わるPictionary(絵引)という言葉、20世紀の絵引を作ったらどうか、常民という概念に縛られていないかなど、モスター教授のコメントは重要点を衝いていた。またメラニー教授がアメリカの研究者の意見を紹介しつつ、「中国の絵図には儒教の伝統を引いて、男女差別があるのではないかと質問した。これに対し、王正華は「宋の時代は、皇帝の目から見ている。Good governanceの様子が描かれているが、清朝の時代になると、市民の目

セッション



文化地図を作成し、すべてをインターネット上で見るようになるようになれば、「研究と教育の新しい段階」が開かれると、壮大な未来図を描いた。これに対し、コメンテーターの橋川俊忠は、その野心的な試みを評価する一方で、果たしてバーチャルな世界がそれほどの汎用性・浸透力をもっているかに疑問を呈し「実物の世界」の喚起力へのこだわりを表明した。

第2の的場昭弘報告は、「認識することはどういうこと

セッション



から見ており、女性がたくさん描かれている」と答えた。ここで王氏はひと言、modernity(近代性)という言葉を使ったが、あとで個人的に聞くと、内藤湖南の「宋の時代からearly modern(近世)が始まる」という学説が念頭にあったという。つづいて金貞我が、朝鮮時代の「平壤監司饗宴図」のなかで描かれている官妓は常民に入れるが、下級官僚は常民に入らないというのは狭すぎるとして、常民概念を「都市を構成する人々」と広く、ゆるやかに規定したいと述べたのは、印象的だった。田島佳也も犀川大橋際の町屋の絵図の上方には、「なんば歩き(右手、右足を同時に出して歩く仕方)をする侍がいたのだが、侍(武士)は常民ではないのでカットしたとのちに私に述べた。

今回のシンポジウムでは常民概念はほとんど出ず、どこかに消えていたが、誰からも何の説明もなかったことを、私は奇妙に感じた。

4 犁から何が見えるか

大会二日目は、「犁の形態比較から東アジアの民族移動に迫る」で、報告者は渡部武(東海大学) 金光彦(仁荷大学) 河野通明の三人であった。それぞれの国の第一級の専門家によるだけあって、見事なプレゼンテーションであった。私は三氏の報告を聞きながら、生産力とは何かを考えていた。私見によれば、生産力は労働手段、労働対象、労働主体の三つによって構成されるが、渡部は中国における犁の起源について、中国古代の犁の形態だけでなく、栽培作物、人間の移動、動物の駆致技術など多面的な角度から、興味ある考察をおこなった。

金光彦教授は古代朝鮮における犁の形態や名称、地域分布などを詳しく説明した上で、犁の形状から、ヨンジャン(道具)は男性器を象徴しており、農民の性意識を表しているとした。いわば民具=犁から、当時の農民の感性やマンタリテ(心性)を読み込まれたのであり、私は深い感銘をうけた(生産力概念の豊富化) について河野報告は、長年の調査・研究にもとづいて、犁を朝鮮型、中国型、混血型の三類型に分類できるとした。また6~7世紀の民族移動ルートを復元する作業をおこない、犁の技術の伝播経路について大胆な推理を示した。これに対し、コメンテーターの尹紹亭(雲南大学)は、「拡大解釈にならないように注意すべきであろう」と述べつつも、「こ

セッション



れで共同研究の基礎ができた」と述べた。金教授も「今回のすばらしい報告を聞いて、私は重大な決断を下しました。韓国における犁の研究書を書こうと思います」と述べた。ちなみに私は、このセッションの報告を聞きながら、図像(非文字資料)の有効性を感じた。もし三氏の報告が、図像の助けを借りずに行われたならば、参加者の犁に対する興味も理解力も深まらなかったと思う。

5 景観を読む

最後のセッションのテーマは、「景観・空間編成分析における資料としての写真の可能性」で、報告者は藤永豪(佐賀大学) 浜田弘明(桜美林大学)であった。「地理学にとって写真は文字資料以上の価値を持っている」「景観の裏側には、人々の暮らしや感情がある」とし、人々の行動がそのまま景観に反映していることを強調した。北京市西単や世界遺産白川郷の景観や相模大野駅周辺の定点観測の写真は非常に興味深いものであったが、澁澤写真にもっと焦点をしばって欲しかったように思う。この点に関連して、鄭美愛(平成国際大学)は70年前の澁澤写真の景観と現在の景観を比較する場合には、ただ行って写真を撮るだけでなく、地元の研究者の協力をえて時代と場所の確定をおこなうこと、また澁澤の旅程を調べておくなど、事前の準備がもっと必要であったと述べた。次に奥野志偉(神戸流通科学大学)は、澁澤写真だけでなく、1930年代の他の写真との比較が重要だとして、『イザベラ・バード 極東の旅』(平凡社、東洋文庫、2005)を一例として挙げた。要するに、中国・朝鮮・日本など

セッション





第2回国際シンポジウム 開催レポート

における景観の時系列変化とアジア地域の横の変化を追及することが大切だというのである。それにしてもコーディネーターの八久保厚志が述べたように、いったい写真と図像はいかなる関係にあるのか、(景観)写真でなければ解明できない問題とは何なのか、私にも知りたいことは沢山あった。

6 総合討論

北原糸子の司会で始まったが、各セッションのコーディネーターの補足説明に多くの時間を割いたために、やや盛り上がり欠けた。他の学会でもやるように、事前にフロアからの発言を何人かに頼んでおけば違った展開になっただろう。工夫が必要である。

総合討論のなかで印象に残ったのは、次の点である。

河野通明は、的場昭弘の意見は「作業班の理解とズレがある。非文字であっても、我々は文字コードにのせて理解している。だから歴史学とつながっていくのだ。科学コードだ」と批判した。時間切れで、議論を深めることは出来なかったが、理論と実証の乖離を象徴する一駒であった。

フロアから「非文字資料にこだわりすぎている感じがする」として、文字資料におけるテキストクリティークの伝統があるように、近世までの絵画にはコード(約束)がある。基本は文字であって、非文字資料は言語の助けなしには読むことは出来ないという発言があった。結局、非文字でなければ伝えられないものは何か、この根本問題に行き着いたように思う。

これからの課題

最後に、残された課題はなにかについて、体系化、比較、人類の範囲の3点にしばって述べたい。

リュ教授は体系化について、「コレクションのコレクション」であると述べた。つまり非文字資料を集め、整理・分類し、データベースを作って、その上で発信のシステムを構築する、これが体系化だと言うのである。私はこの定義にたいへん親近感を覚えた。なぜなら、こういうことならば、すでに我々は福島県会津の只見地域を対象に、その作業に取り組んでいるからである。まだ不十分とはいえ、来年秋までには、その成果を一般に公開することが出来るであろう。また犁、景観のグループもそれ

ぞれの立場から、体系化について言及した。いわば抽象的で茫漠としていた「体系化」が、我々の手の届くところまで来たのである。

は比較についてである。私は常々比較は2つよりも3つが良いと述べてきた。たとえば、日本の亭主は食後、皿を洗わないが、アメリカの亭主は洗うでしょう。これから、日本の亭主は封建的・家父長的だが、アメリカの亭主は近代的で民主的だという結論を導き出したとすれば、どうであろうか。間違いとはいえませんが、おそろべき単純化をおかす危険性すらある。というのは考察の対象を韓国、中国、ベトナムなどアジアに広げ、かつヨーロッパなどに拡大すれば、皿を洗うアメリカのほうが特殊かもしれないし、最近では日本の亭主も食後に皿を洗うほうが多数派かもしれない。つまり比較は2つよりも3つのほうが有効であるし、比較の対象も動いているのだ。

今回は図像、民具、写真班は中国、韓国、日本の三国の比較で統一されていた。それだけに興味ある論点が様々に提出された。私が今回の国際会議は成功とみなす理由は、ここにある。しかし、メラニー教授が「早く図像をドイツで見られるようにしてほしい。頑張りましょう」といい、奥野教授が写真班に対して、「景観写真データはいつ出来るのか」と催促したように、データベースの作成は、COEプロジェクトが終わるまでのあと「一年以内」に完結しなければならないのである。時間との勝負に入ったことを強調しておきたい。

最後に、今日のシンポジウムのテーマは「図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く」となっているが、その「人類文化」というのは、どの範囲をさすのか。ヨーロッパ、アフリカ、南米は「人類(文化)」に入らないのか。これは神大COEプロジェクト全体にかかわる大問題であって、早急に態度をきめる必要がある。それほど多くない研究員全体で世界の「人類文化」を相手に出来ないなら、せめて中国・韓国・日本そしてベトナム、インドなどアジア地域に限定して、研究を深め、総括していかねばならない。

昨年は、川田順造教授のフランス、アフリカ、日本についての報告があったが、今後はどうなるのか。私個人は、研究者数、時間の短さから判断して、中国・韓国・日本三カ国にしばって纏めていく以外にないと思うが、これも早急に議論し、確定する必要がある。

第2回国際シンポジウムを終えて

第2回国際シンポジウムは、図像、民具、景観に関わる日本、韓国、中国の地域 東アジアに焦点が絞られた発表がなされました。カナダ、ブラジル、ヨーロッパからの先生方も交えて、東アジアの研究者がこのように交流できる機会は、研究そのものが実り豊かになっていくだけでなく、先の大戦を経験した東アジアの人々の心の中に、信頼と友情を育てていく平和の礎のように感じました。

このプロジェクトのサブリーダーを務めてくださった人類学者、川田順造先生は文化の比較には2つの方法があると述べています。そのひとつは、「連続の中の比較」で、今回のシンポジウムのように、伝播、系統、

影響が解明されます。そして、もうひとつの比較は、「断続における比較」、先生の提唱、文化の三角測量で、新しい時代まで相互に影響がなく、異なる指向性を持ってきた文化間の比較です。この比較は、人類文化の隠れていた根源的な意味を発見する手掛かりとなります。このプロジェクトが「人類文化」という言葉の持つ重さをこめた以上、今後、断絶における比較 東アジア以外の文化間の比較が、不可決のように思います。

このプロジェクトが、東アジアから人類文化のための研究へと、さらに発展することを信じると共に、若手研究者からプロフェッショナルな人類学者へと、私も成長していきたいと思えます。

大西 万知子(2003、2004年度COE研究員・RA) ONISHI Machiko

海外提携研究機関代表者懇談会

昨年度に引き続き、シンポジウムの初日、海外提携研究機関代表者懇談会を開催しました。8提携研究機関の代表者を招聘しましたが、欠席された香港大学と韓国の延世大学を除いた、6機関の代表が参加しました。懇談の中では今後のCOEの継続の見通しなどが話題になりましたが、プログラムの終了後も相互の交流を継続させ、今後は若手研究者だけではなく教員同士の交流を深めていくことを双方で確認しました。

日 時：10月28日(土) 12:15～13:30

場 所：神奈川大学横浜キャンパス24号館310室

出席者：＜提携研究機関＞

王勇(浙江工商大学)

高小康(中山大学)

周曉霞(華東師範大学)

康麗(北京師範大学)

マダレナ コルダロ(サンパウロ大学)

クリスティーナ ラフィン(ブリティッシュコロンビア大学)

＜神奈川大学＞

福田アジオ・中村政則・橘川俊忠・田上繁・大里浩秋

佐野賢治・西和夫

主な懇談事項：

1. 福田アジオ拠点リーダーから出席者の紹介
2. 提携研究機関代表者自己紹介
3. 若手訪問研究員・派遣研究員についての意見交換





只見町・神奈川大学COE共催 シンポジウム

民具は世界を結ぶ 人と自然を結ぶわざ

Material Culture of a Mountain Village

自然と人間との対決、協調、妥協などの結果が非文字資料としての民具に凝縮されているとの観点から、民具を通して地域文化・人類文化研究の可能性について事例が提示され討論が行われた。

開催地、只見町には、国重要有形民俗文化財「会津只見の仕事着と生産用具」をはじめとする山村の生産生活用具・民具がおよそ8000点、整理・保存されている。これらの民具を、民俗学・民具学・考古学・科学技術史・文明史・人類生態学などの視点から、また、会津 日本 アジア 世界へと、ローカルからナショナル、リージョナル、グローバルな立場にまで視野を広げて検討し、併せて只見町をフィールドにして検討を進めているインターネットを活用した地域統合情報発信システム「只見インターネットエコミュージアム」(仮称)の可能性を映像で紹介した。

(佐野 賢治)



日時 2006年11月12日(日) 13:00~16:00

会場 福島県南会津郡只見町 「湯ら里」コンベンションホール

プログラム

- 挨拶：・小沼 昇(只見町長)
 ・福田 アジオ(神奈川大学21世紀COEプログラム拠点リーダー)
- 映像紹介：・佐野 賢治(神奈川大学教授・COE事業推進担当者)
 ・小野 博(コンテンツ株式会社代表取締役)
 「只見インターネットエコミュージアム」システムの概要および映像紹介
- パネルディスカッション：
 ・佐々木 長生(福島県立博物館専門学芸員・COE共同研究員)
 「只見町の生業と民具 雪・山・川をつくる世界」
 ・周 星(愛知大学教授)
 「中国農具研究の視座 農業考古学から民具研究へ」
 ・河野 通明(神奈川大学教授・COE事業推進担当者)
 「犁の比較民具学 東アジアの民族移動」
 ・スチュアート ヘンリ(放送大学教授)
 「生存からサバイバル文化へ 民具に見る継承の役割」
- 総合討論 「民具は世界を結ぶ 人と自然を結ぶわざ」

只見町の生業と民具 雪・山・川をつくる世界
佐々木 長生 SASAKI Takeo

福島県南会津郡只見町は、747平方キロメートルという東京23区がすっぽりとお入るほどの広大な面積を有している。その大半がブナなど落葉広葉樹におおわれ、面積の94パーセントを占めている。冬期間は、「丈余りの雪」と呼ばれる豪雪におおわれ、その雪解け水はブナ林に保水され、徐々に多くの沢をとおして麓に注がれ、伊南川や只見川へと流れ日本海に達する。この豊富な水量を利用し、発電し首都圏に電力を供給し、日本の近代化に大きく貢献してきたといえる。発電所ができる以前は、マスやアユなど日本海から多くの魚が遡上してきた。人々は、これを捕りタンパク源として食してきた。

雪は、春先雪崩となり急傾斜の山肌を滑り落ち、麓には肥沃な土砂を堆積し、そこにはブナ林を育成し、ゼンマイなどの山菜やキノコ、また豊富な木の実を餌に熊・カモシカ・鳥類などの恵まれた生息地となり、狩猟や採集などの生業の場となってきた。このような自然の恵みを、只見地方の人々は長年生活に利用してきた。その自然と人との関わりの中から、さまざまな生活用具が考案され、利用されてきた。只見地方の自然の植物などを素材として、創意と工夫を重ねながら長年にわたり伝統的に作り上げられたのが、只見町に現在保管されてきた民具といえよう。

只見地方は、帝釈山・越後山地の懐に位置し、六十里越峠・八十里越峠などを介して新潟県との交流が多かった。その一例にテンズラと呼ばれる鎌の柄に板製またはマタタビ製の泥除け具を装着し、耕す方法が見られる。これは石川県から秋田県の日本海側で使用されており、福島県内では只見町と大沼郡金山町横田地区の一部にすぎない。

一方、只見川流域の奥会津地方のみに使用されてきた民具もある。カノと呼ばれる焼畑において使用されてきた穂摘み具のコウガイがある。これはアワやキビなどの穂摘みに使われ、只見町に隣接する新潟県旧入広瀬村や旧下田村などに見られるが、民俗事例では全国的にもこの地方のみである。青森県や岩手県の古代遺跡からコウガイと同形のものが出土している。只見地方の民具には、このような地域的に見てもまた編年的に見ても注目すべきものがある。

また、只見地方には多くの職人たちが「巻物」と呼ばれる、職祖の由来や祭の方法などを記述した職人巻物を所持し、生業としてきた。巻物を所持することが一人前の職人という自覚が強く、番匠（大工）などは現在でも上棟式に巻物をひろげ祝詞をあげている。只見町に約600本の巻物が存在していることが、神奈川大学日本常民文化研究所の調査によりわかった。職人巻物の民俗が現在にも生きていることを証明している。

只見町には、これらの自然と人間の生活との関わりを物語る豊富な民具と、これらの民具を整理した町民自らが調査し、記述した記録カード、また民具の製作および使用方法を実演した映像記録など非文字資料も整備されており、人類の非文字文化を究明するうえで極めて有効な資料が整いつつある。これらの情報を全国的に、世界的に発信する「只見インターネットエコミュージアム」(仮称)構築の準備を只見町の協力のもと、神奈川大学COEが検討を進めている。

写真1



初冬の只見の山並みと集落 入叶津から浅草岳を臨む

写真2



コウガイで粟を摘む 1984年10月、大沼郡三島町大石田にて



中国農具研究の視座 農業考古学から民具研究へ 周星 ZHOU Xing

農耕文明の国と言われる中国では、古くから、集約農業を特徴とした高度な農業技術が発達し、それに合わせて様々な農具も発明された。20世紀50年代以来、中国の農具研究において、特に「農業考古学」は大きな実績と発展を成し遂げてきた。大規模な社会主義の建設運動に伴って、考古学の発掘が繰り返され、多大な成果を収めた。その中には、青銅器・陶磁器・玉器などといった輝かしい「宝物」がある一方で、芸術性や鑑賞性に乏しい、素朴な農具や農業関係の資料が出土されているが、それらを軽視する傾向が少なからず存在した。そのため、陳文華教授をはじめとする一部の考古学者は、農具と農業関係の考古学資料に注目し、「農業考古学」という学問分野を作り出して研究活動を進めてきた。彼らの活躍によって、1981年に『農業考古』雑誌が創刊されたり、中国農業考古研究センターも設けられた。以来25年間で、農具関係の資料と研究論文が多く掲載されるようになり、その結果として、農耕文明を支えてきた農具体系の形成過程は、ほぼ明らかになったといえよう。

農業考古学の研究対象の範囲は、農作物の遺物・遺痕、動物（家畜）の骨や模型、農具、農地や田んぼの模型、農作図など様々で幅広い。農具はその中の重要項目になるが、全てではない。農業考古学の代表的研究成果として、1994年に刊行された陳文華教授著『中国農業考古図録』が挙げられる。この図録には、1700枚の写真が収められ、古代農業の輪郭や農業考古学の主要な成果も総括的に紹介される。古代農具の使い方などについて説明するためには、少数民族が住む周辺地域や奥地の田舎で、現在でもまだ使われている同じ農具か、あるいは類似のものが比較の対象として取り上げられたケースがしばしばある。これは典型的な「民族考古学」の方法である。

農業考古学で取り扱われる古い農具や歴史文献に記載される伝統農具と、田舎と僻地において現在でも使われている農具の間には、一種の「連続性」が存在する。つまり、農業考古学の「古代志向」に対して、「現実志向」の民具研究も中国にとって必要なのである。農具研究のキーワードは「生産」であり、民具研究のキーワードは「生活」全般である。従って、農業考古学から民具研究への発展は、視野と研究のパラダイムの転換が避けられないという考え方である。

今の中国では、農具の民具学的研究はまだ本格的に始まっていない。「民具」という学術用語さえ、ごく最近、日本からの紹介により、関係学界で使われ始めたが、定着するまでは時間が掛かるようである。中国民俗学の分野において、民具研究に近い研究成果が見られるようになりつつあるが、「民具の宝庫」と呼ばれる中国にとっては、まだ十分とは言えない状態である。これから、隣の中国においても、学問としての民具研究の時代がやって来るのではないかと信じている。



写真1

東(後)漢画像磚：踏碓（四川省彭縣出土）

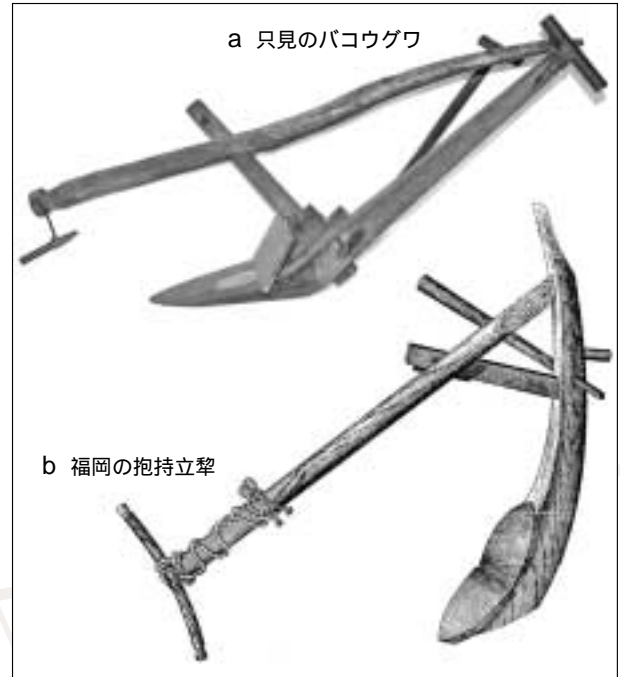


写真2

東(後)漢陶模型：風車・踏碓（河南省洛陽出土）

犁の比較民具学 東アジアの民族移動
河野 通明 KONO Michiaki

只見の犁は抱持立犁ではない 右図のaは只見町で使われていたバコウグワ(犁)で、『図説 会津只見の民具』には「大正時代に使用された 抱え持立式」と説明されている。だがbの明治時代に福岡県人の広めた抱持立犁とは明らかに別系統で古い型。では、いつ、どこから伝わったのか。
犁の形と地形・土質は無関係 むかしから北九州では小振りな無床犁が使われて、近畿地方では長床犁が使われてきた。そして小回りのきく無床犁は畑作用、犁床が長く安定のいい長床犁は水田用ともいわれてきた。ところが福岡県では田でも畑でも山田でも平地の田でも無床犁を使ってきたし、近畿地方では田でも畑でも山でも平地でも長床犁を使ってきた。犁の形は地形・土質とは関係なかったのである。では犁の形は何で決まるのか。



無床犁は朝鮮系、長床犁は中国系 犁はカラスキと呼ばれることからしても日本人の発明ではなく、朝鮮半島や中国から完成品が伝わったのである。そこで朝鮮半島や中国の在来犁と比べて見れば、じつは北九州の無床犁は朝鮮系、近畿地方の長床犁は中国系であった。

無床犁は渡来人の持ち込み、では中国系長床犁は？ 無床犁は朝鮮半島からやってきた多くの渡来人が、生活用具として牛とともに持ち込んだと考えれば辻褃が合う。ところが中国からの渡来人が大挙して日本にきたという歴史はない。にもかかわらず九州から関東まで中国系の長床犁は広く分布している。これはなぜか。

朝鮮系のあとから中国系長床犁の波を被る この手がかりとなるのが伝来時期。朝鮮系渡来人の犁持ち込みは、紀伊半島の首木がウナグラと呼ばれていることから6世紀と推定される。また山口県の海岸沿いにウナグラと呼ばれる別系統の朝鮮系首木が使われていて、ここにも6世紀に渡来人が来ていたことが確認できる。ところがこの地方の在来犁は、朝鮮系と中国系の混血型であり、朝鮮系渡来人による無床犁持ち込みより後に、中国系長床犁が強い圧力をもって普及させられた痕跡と見られる。その時期は6世紀より後なので7世紀であろう。

大化改新政府の長床犁導入政策 7世紀なら唐との民間貿易はまだ行われておらず、政府による遣唐使ルートしかなかった。そして地方制度の整備や遣唐使の派遣状況からすれば、唐の長床犁を導入したのは7世紀中葉の大化改新政府に絞り込まれる。中大兄=天智政権が唐の犁をもとに500ほどの政府モデル犁を作って各地の有力者のもとに届け、コピー犁を作らせて普及を図ったことになる。この大化改新政府が全国に政府モデル犁を配布したという仮説は、7世紀に香川・兵庫・長野県から、日本特有の一木へら犁が出土したことで、検証できた。

純粹朝鮮系犁はなぜ？ 滋賀県や関東地方には、混血していない朝鮮系無床犁が見られる。これは政府による長床犁普及政策の出された以降に持ち込まれたと考えれば辻褃が合う。そうなれば渡来の最後の波、百済・高句麗難民の持ち込みとなる。以上をまとめると、次のような民具の犁の形から地域の古代史を読み出す公式が導かれる。

- a 政府モデル犁 渡来人が来なかった地域
- b 混血型 6世紀に朝鮮系渡来人が来た地域
- c 純粹朝鮮型 7世紀の百済・高句麗難民入植地

只見は何型？ そこで只見はと見れば、Cの純粹朝鮮型で、只見にも1300年前、百済・高句麗難民が入植していたことになる。只見の皆さんはひょっとしてその子孫???。只見の研究はこれからである。



生存からサバイバル文化へ 民具に見る継承の役割

スチュアート ヘンリ Henry STEWART

民具の研究は長い間、主に民俗学の独壇場であったが、最近文化人類学でも「民具」はモノの研究対象として注目されている。モノの研究は民具研究と重なるところが多いが、民俗学における民具は主に主流社会の庶民、もしくは常民が使う生産用具を含めて生活用具をさす用語である。文化人類学における「モノ」は、それぞれの国家の主流社会のモノの研究も、少数・先住民族やエスニック集団の生活用具全般も研究対象としている。また、用具そのものだけではなく、用具の材料をどのように採取・入手するのか、用具の所有や管理のあり方などの側面にまで調査する。

さらに、生活用具の使い方のほかに、用具のもつ社会政治的な意義について文化人類学者が追究する。表題にある「生存からサバイバル文化へ」に込められている意味は、イヌイトの事例にみられるように、そもそも生存のためだった用具が近年、文化的なサバイバルとして活用されていることである。それはどのようなことであるかということ、少数・先住民族にとって民族の独自性 主流社会とは異なるエスニシティ が表象方法の一つとされている。つまり、伝統的な用具を使って伝統的な生業活動を行なうということである。たとえば、8~9月に魚掬で石造りの築でホッキョクイワナをとって冬の保存食とする活動には、イヌイトのエスニシティを外に向けて表象するとともに、自らのエスニシティを確認・強化する意味がある。

現在の極北の村にあるコープの店でありとあらゆる工業製品や、アボカドからインスタントラーメンまでの食料品を店で買えるので、狩猟と漁撈をしなくとも生存は可能である。それでも魚掬で漁撈を行なうのは、イヌイトがイヌイトであるという証であるからである。マーセル・モースが『エスキモー社会：その季節的変異に関する社会形態学的研究』で指摘しているように、石造りの築で集団が集まり保存食を蓄えるとともに、イヌイトの世界観では一年を夏と冬に分け、夏の間は家族単位の行動から、地域集団が集合して冬の集団生活に切り替えるイベントとして、築漁に社会的な意義があった。その伝統が今のイヌイト社会に引き継がれている。

1950年代までの季節移動生活は、カナダ政府が設置した定住村に変わり、イヌイト社会の近代化が一気に進んだ。衛星テレビを見ながらセントラル・ヒーティング完備の5LDKの家に住む現在のイヌイトであるが、漁撈をはじめアザラシ猟、カリブー猟を続けている。日本の農民とは違って、イヌイトの「近代化」は必ずしも自発的、自主的ではなかったが、「近代化」は「伝統」を滅ぼしているのではなく、数千年前から変わりつつある「伝統」が今でも状況に応じて変化していることを如実に示している。伝統の継承と近代への適応の蝶番の役割を果たしているのが、生活用具＝民具である。この視点からして、日本の民具研究は世界に広がる可能性をもっているといえる。



只見シンポジウム 講演風景

- ① 佐野 賢治氏による司会進行
- ② 佐々木 長生氏による講演
- ③ 周 星氏による講演
- ④ 河野 通明氏による講演
- ⑤ スチュアート ヘンリ氏による講演



色彩認識の象徴化 京劇の臉譜の表すもの

劉 湯冰 (COE研究員・RA) LIU Keping

一般の日本人の京劇に対するイメージは騒々しい音楽、甲高い歌声、そしてあの派手な臉譜(隈取り)だろう。

臉譜は、京劇の特徴が非常によく出ている特別な化粧法である。花臉の役柄にあたる者だけが施す化粧でもあり、全てのキャラクターの性格、地位生活習慣にあわせて、目、鼻、口、眉、額に異なる図案と色彩が勾(筆で書く)・揉(すりこむ)・抹(塗る)の技法によって施される。臉譜は歌舞伎の隈取りに似ているが、それは役者が色と形で自分の顔をキャンバスにして描きだすものである。そこには、中国人の持つ色に対するイメージ、形に対する感覚が表現されているのである。

臉譜の起源は南北朝と隋唐時代(368~907年)に行われた「仮面歌舞」であった。現在、臉譜に使われている色は主色、副色、界色(境界色) 襯色(添え色)に分かれ、そしてそれぞれの色はそれぞれの性格を象徴、表現している。主色は基本の色で、人物の性格の特徴を示す。副色は主色の補助色で、隈取りに彩りを添え、図案を鮮明にする。襯色は、主色、副色のために使われたさまざまな他の色である。

隈取りは、どんなに色を使っても、臉紋がどんなに複雑になっても、必ず種類の主色で、人物の個性を表す。至誠、赤誠である関羽は紅で、廉直、正義の裁判官である包公は黒で、そして奸計と知謀の曹操は薄白で表している。以下それぞれの色が象徴するものを記してみよう。(趙夢林1992『京劇臉譜』p.25「臉譜的象徴性表現手法」よりまとめたもの)

中国劇は人物の性格を表し、また人物本来の面目を乗り越えるために、美学の観点から最も代表的な特徴を誇張し臉譜を描いた。遠くから見ると性格が一目瞭然で、色彩ははっきりしていて、近くで見ると図案が精細である。「遠看顔色近看花」の技術効果がある。これは大胆なしかも巧妙な表現手法である。人物の容貌(年齢、美醜)だけではなく、社会的地位、普段使っている武器まで図案で反映することができる。

紅が最上の色と言われる理由はおそらく紅を人間の生命力の象徴としようとする中国人の古くからの呪術宗教的な一面に起因しているのだろう。いずれにせよ、京劇の重要な要素である臉譜とは、中国人が色に託したイメージで性格を表象させようという試みなのである。

紅 紅は最も尊ばれる色で、至誠、忠義を象徴している。代表は関羽である。

紫 紅の次に尊い色で、血気盛んだが肅然とした性格を現す。紅や黒と併用し、若き日の直情・血気が年齢を重ねることで重厚さを増したことを示す。

黒 三国志の英雄・張飛や水滸劇の李逵など、沸き上がる激情をどうにも押さえられず、ついつい粗暴、過激な振る舞いをしてしまうものの、実際は無私で真心の固まりのような性格を表現する。また、包公に代表されるように、顔形が醜いものの廉直である性格をも示す。

白 白には猜疑、陰謀の気象が宿る。奸智に長けた武將は白を使う。曹操など典型的である。薄い白は必ずしも大悪という訳ではない。眉や目が細く描かれていればいるほど、奸計に長けた大悪人である。

藍 黒に近いが、より粗暴な一面を持つ色である。黒の上に藍を重ねた場合、単に粗暴、剛毅だけではなく知謀にも優れている。

青 緑に近い性格である。邪神、妖怪、物の怪、妖気、化け物などの色。

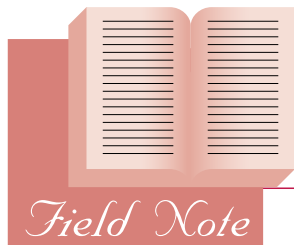
緑 藍色と似通った性格である。同じく凶暴でも緑は爆発気味、常に平静ではいられない性格を表す。

黄 粗暴で陰謀をめぐらす、それを表面に出さない人物に使う。勇戦する武將を示す。

灰 壮年の血気も薄れた様子を表すため、光に反射しないように顔料の油分を抜く。若い時に黒色だった者が老境にある状態を示す。

金 仏教の教典にある「身に金光を現す」にちなみ莊嚴、嚴肅を表す。神、仏に使われる色である。

銀 金に次ぐ高貴な色である。比較的低位の低い神や仏に使われる。



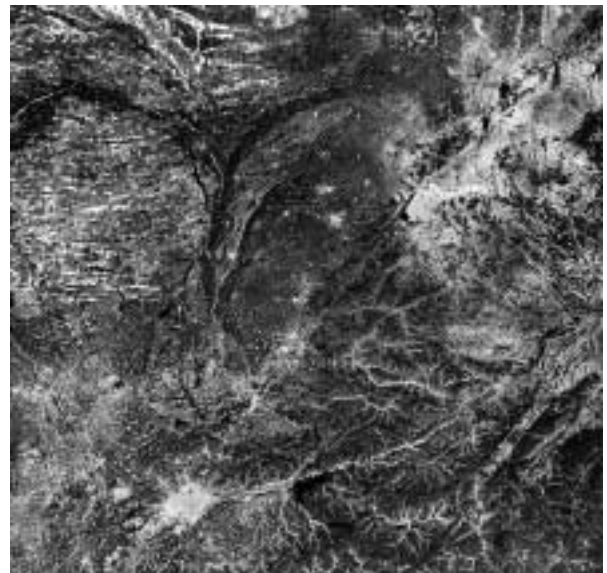
中国東北部、 旧満洲の旧神社跡地調査報告

堀内 寛晃 (COE調査研究協力者) HORIUCHI Hiroaki

荷を解いてほっとしたのも束の間、インターネットのウェブニュースを読んでいた私の目に飛び込んできたのは、「瀋陽の日本領事館前で暴動」の文字であった。ここ数年の恒例のニュースである。調査から帰国したのは前日8月14日。日本の植民地時代の中国大陸旧支配地域の中心であった瀋陽(旧奉天。以下奉天と表記。)を皮切りに、旧植民地時代の神社跡地を巡ってきたばかりであった。

調査は中島三千男先生が10年程前から取り組み、2003年度からは「神奈川大学21世紀COEプログラム」に組み入れ続けられている「旧植民地の神社跡地調査」の一環として、今年度は旧満洲地域を対象に2006年8月5日から14日まで行われた。参加者は、中島先生・津田良樹先生と歴史民俗資料科学研究科大学院生の尚峰さん(中国からの留学生)に私の4人。広大な中国東北部の中でも、特にその中央部、南満州鉄道沿線に付属地と呼ばれる主要都市が集中した奉天から長春(旧新京。以下新京と表記。)までの地域での聞き取り・遺構の実測調査に従事してきた。分担は、中島先生が全体のコーディネイトと聞き取り及び写真撮影、津田先生が聞き取り及び作図のための実測・撮影、尚さんが聞き取り及び現地移動時等の通訳、私が実測・撮影である。

旧満洲の神社を歴史学から捉えた既往研究としては、嵯峨井健氏の『満洲の神社興亡史』(芙蓉書房出版、1998年)などがあり、建築・都市計画の既往研究としては越澤明氏の『植民地満洲の都市計画』(アジア経済研究所、1978年)、『満洲国』の研究』(京都大学人文科学研究所、1993年)所収の西澤泰彦氏による「満洲国の建設事業」などがある。旧満洲地域の神社の総数については『満洲年鑑』(昭和20年版)を基本とした『神道史大辞典』付編「関東州及び満洲国の神社」(佐藤広毅編)では1944年までに302社が建てられたとされ、またその性格・規模・歴史については『満洲の神社興亡史』では国家的神社、都市型神社、開拓団神社、軍隊内神社及びその他の5つに分けられるとしている。そして大規模な国家的神社及び大規模かつ歴史のある都市型神社が満鉄沿線の都市部に集

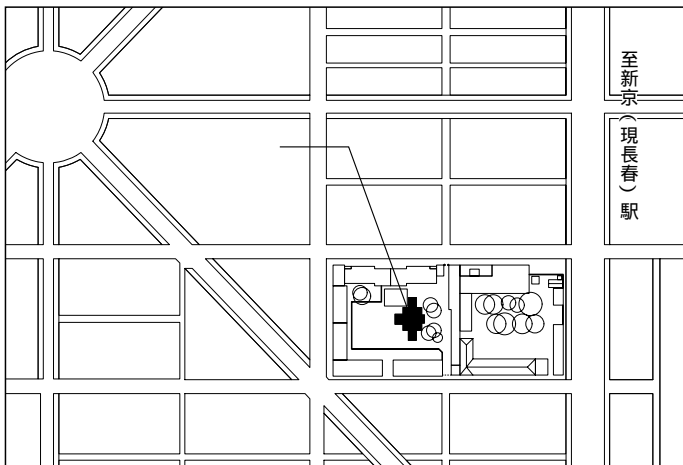


現地衛星写真 (google earth)
へびがカエルを飲み込んだ様に都市が連なる。

新京
公主嶺
四平
開源
鉄嶺
撫順
奉天

中して、今回の調査対象は全満洲に建てられた300余社の神社のうち、そのような『満洲の神社興亡史』の分類中での国家的神社及び都市型神社を主とした10社であった。

8月4日奉天到着の日からすぐ現地を下見し、翌5日から聞き取りを始めた。事前に用意した「この調査が日本の過去の植民地支配の実態を正しく把握するためのものである」という説明書きを提示しながら、道路沿いの部分が商業施設(飲食店街)その他の部分が軍関係の劇場・宿舎・公園などになっている奉天神社跡地で、道行く老人に声をかけ続けた。また実測については予め用意した『南満州鉄道経営沿革全史』所収の満鉄作成の各付属地の地図を元に跡地の現況を記録したが、元々は植民地時代の都市生活の中心であった神社も、満洲国崩壊後60余年経ち大まかな区画以外は当時の様子が見えなくなり、さらに前述のように大部分が軍関係の施設になっていて記録・立ち入りを憚られる雰囲気もあり、調査は難航を極めた。礎石敷石の類いも無く大きな区画の中で社殿の位置の検討も難しい状況で、唯一旧満洲の平坦



新京神社現況配置図 約1/6000
 拝殿 鳥居 駅前から伸びる大同大街(現人民大街)



今も現地に残る社殿(左図)

な都市の地形の中から不思議とくっきり浮かび上がっていた公園の中の築山を当時の地図と対応させて本殿の跡地ではないかと予想するにとどまった。聞き取りで得られた位置とも食い違っており、位置の判断には慎重を要すると思われる。駅前から伸びる所謂バロック的都市計画の名残である放射状の道路や、駅舎、ホテル、医科大学、銀行などの施設は比較的そのままののに比べ、神社跡地の痕跡の無さは今後の調査の難しさを予想させたが、聞き取りで得られた感触では終戦後すぐに社殿が取り壊されたという様子でもなかったのが印象的であった。

7日からは移動しながら沿線の神社跡地を回る。7日は撫順神社、8日は鉄嶺神社、9日は開源神社、10日は四平へ移動し、四平神社跡地を調査。ここでも跡地は軍の施設になっていて中へは立ち入れず。翌11日は沿線から少し外れた西安神社を調査し、西安神社では万人坑の資料館の前館長、劉玉林さんにお世話になった。西安神社跡地にはおそらく社殿であろうRC造の奇妙な建物が建っていたが、調査を拒否されてしまう。当時の炭坑の炭住や幹部社宅が神社の周囲でそのまま使われ、万人坑が残るこの街では当時の記憶がまだ生々しいのだろう。12日は公主嶺神社跡地へ行き、その足で蘇家屯経由で新京へ向った。

13日は列車の時刻ぎりぎりまで新京神社と国家的神社 建国神廟、建国忠霊廟の調査を行う。この3社は確認できる遺構が何らかの形で残っており、当時の状況をかき見ることができる。建国神廟は皇帝溥儀自身が満州国の中心に設立したという意味でこれまで見てきた付属地の神社と性質が異なるもので、皇宮の前庭に基壇のみが残っており、背後には地下防空壕が今もそのままある。社殿は満州様式を加味したものだったそうだが崩壊の際に

燃やされたという話も残る。また建国忠霊廟は建国神廟が満州国における宮中賢所の性格を持つものに対し、日本における靖国神社の性質を持っていた施設で、満州事变以後の戦没者が祭られていた。広大な神域が現在は住宅団地になっており軒先まで集合住宅が迫るが、巨大な四合院の様な神門・東西殿・拝殿と、拝殿の背後の神殿は廃墟になって残っている。一時は空軍の施設となっていたそうだが、現在は何も使われていないようであった。新京神社は現在幼稚園として拝殿だけが利用されており、すぐ脇の道路から高い塀越しに破風を覗くことができた。

短い調査だったがこの調査では下記のようなことを感じた。

1. 付属地内の神社跡地に立ってみても地形的、都市空間的な配慮が感じられなかった。鉄道、公園などの近代的な都市施設と単純に併置されていた。
2. 聞き取りから拝殿や社務所は比較的長く残存し別の施設として利用されていたことがうかがえた。また少数ながら現在も再利用されている社殿があったが、多くはある時期において他の都市施設と異なり取り壊され、跡地は公的な施設に利用転換されていた。
3. 神社は人為的に造られた旧満洲の都市と同様、宗教施設としても都市空間としても根付かず、そのため戦後すぐに取り壊されることはなかったようだが、一方容易に再利用・解体・跡地の利用転換が為されていた。

結局神社跡地は魅力的な都市空間として継続せず、満州国建国の矛盾した夢のように、当時の計画で建設された都市そのものも成熟に失敗しているように思えた。植民地での人為的な都市の建設、強制的な国家の設立の結果、魅力的な場を造り得なかったという事実から我々がもう一度考え直すことは多いのではないだろうか。



軒端の鞆 『絵巻物による日本常民生活絵引』のひとこま

藤原 重雄(東京大学史料編纂所) FUJIWARA Shigeo

『絵巻物による日本常民生活絵引』(以下、平凡社刊の新版を参照。『絵引』と略す)の利点は、特定の関心に沿って、絵から部分を切り取る ことへの思い切りのよさである。部分に名前を付けてゆくことは、絵に表象された世界を分節化して理解することになる。また、画面に対して網羅的というより、典型例を選択的に取りあげ、小テーマに即した解説を見開きで収め、索引による相互連関をはかっている。この点も含め、最近では佐藤健二「図を考える/図で考える 形態資料学と「絵引」」(『文化資源学』1、2003年)にその意義が整理されており、ご一読されたい。

これまで『絵引』は、美術史学から十分に敬意が払われてきたようには見えない。絵画が何らかの事実の再現・反映であって、それを突き詰めようという態度は、いかにも素人的な絵画への接し方に映ったのであろう。確かに素朴な部分理解の積み重ねは、そのまま表象の全体を把握することにはならない。しかし、細部と全体との往還を意識して絵を見ることにより、画面の理解は深まるものと考えられる。『絵引』の名付け・記述には、こんにち修正を加えるべき点もあるのだが、そうした誤りとて、後学には考察の糸口となることも確認しておいてよい。以下ではそうした事例をとりあげる。

拙稿「中世絵画と歴史学」(石上英一編『日本の時代史30 歴史と素材』吉川弘文館、2004年)では、南北朝時代に成立した絵巻『慕帰絵』からいくつかの段をとりあげて、絵画との距離の取り方、ないしは分析の水準を変えながら画面を読んでみた。特に巻5第2段では、『絵引』を基礎として記述した。この段は、主人公の覚如が親鸞聖人の伝記絵巻を制作する話が詞書にあるが、それと直接対応する場面は、画面の奥三分の一程度に描かれる。この段の絵の前三分の二は、京の街路に遊ぶ人・行き交う人を描き、詞書とはあまり関係がない。

絵の最初の部分にあたる町屋には、軒先に白い丸いものが下がっている【図版1】。『絵引』第5巻797「こままわし」では、「鼓、太鼓?」として疑問を残しながら、解説でも「なお簾のまえ、軒下に釣りさげであるのは鼓か太鼓のようなものではないかと思われる。そうしたものを神仏の前にさげ、これをならして拜むことがひろく流行するようになったのは鎌倉末ごろからのようである。」と記述している。浅学にしてこうした歴史的・民俗的事例

を知らないが、他の絵画作品を見ていて、これは蹴鞠に用いる鞆を描いているのだと気がついた。

最初のきっかけは、近世前期の『職人風俗絵巻』(国立歴史民俗博物館蔵。カラー図版は『近世風俗図譜』12・職人、小学館、1983年。サントリー美術館『日本絵画に見る女性の躍動美』2003年にでも展示)の鞆屋の場面で、鞆作りをしている町屋の軒先に下げられた、星型で中央が丸くあいた黒い板状のものであった【図版2】すると上杉本『洛中洛外図屏風』の上京隻第三扇の中ほど、六角堂境内から門外へ出てゆこうとする二人組にも目が留まる【図版3】。法体人物の後ろに従う男が手に持つのは、『慕帰絵』に描かれた鞆と同種である。鞆を多角形の枠にはめて持ち運んでいたのであろう。

そこで蹴鞠関係の故実書を繰ってゆくと、この枠は、「腰夾(こしはさみ)ないし「鞆夾」と呼ばれていたことが確認できる。蹴鞠の鞆は完全な球形ではなく、円形の革二枚を帯状の革で縫い合わせたもので、やや凹んだ縫い目が一週している。この部分は「腰」と呼ぶにふさわしく、紐を廻したり、枠で挟み込んで固定するのに具合がよい。比較的早い所見として、弘安九年(1286)ごろに書かれた『革匁要略集』(渡辺融・桑山浩然『蹴鞠の研究』東京大学出版会、1994年)に、次のような問答が見える。

問、「腰挿^{ハサミ}二ハサミテ(鞆を)出ス事無之哉、(中略)如何。」示云、「腰夾不出仕者也。彼八只内々置鞆、只八損スル間、ハサミテ懸テ置料物也。然而又、每人持之、執之間、蒔・貝摺・木絵シナトシテ持タル事モ有也。(下略)」

すなわち、腰夾は内々に鞆が痛まないように懸けて置くためのものである。しかし、蒔絵や螺鈿・木絵などの装飾を施したものを、多くの人が持ちたがるという。実際、『蹴鞠』(大日本蹴鞠会、1938年)という図録に掲載された「鞆夾」は、比較的新しいものと思しいが、八角形(各辺は内側に弧を描く)で文様が施されており、鞆を挟んだうえ、飾り紐が下がる。

近世初頭の伝授書『松下十巻抄』(『続群書類従』一九中)には、「鞆はさみの事、こしはさみと云なり。」とあり、「こしはさみは内儀のものなるほどに」、「こしはさみは大方略儀也、鞆をそんさ〔せ〕じがためなり。」といった性格づけが示されている。同書には枠の大きさも書い

てあり、『蹴鞠百首和歌』(同前)の末尾にも後補と思しき挿図が付加されている。ちなみに「鞠挟」は、『日葡辞書』に、「籐あるいは籐に類したもので作った弓の一種で、日本の鞠をはさんでつるしておくためのもの」(邦訳)と載る。

『慕帰絵』より先行する腰夾の絵画史料として、『伊勢新名所絵歌合』上巻に描かれた事例がある。『伊勢新名所絵歌合』は『絵引』にも採られているが、原本が現存するのは下巻の一部で、上巻は近世の模本でしか伝わらず、『日本絵巻物全集』・『日本絵巻大成』にも参考図版として掲載されるが、参照されることが少ない。歌合発起者とおぼしき法体人物の邸宅で、庭には懸りの木四本の植えられた鞠場があり、中門廊の軒先に腰夾に挟んだ鞠と柳の枝が描かれている。この枝は、鞠を鞠場へ持ち運びする際の道具でもある。この事例では、周囲の環境から、見てすぐに鞠と分る。

なぜ鞠は軒端に懸けられているのか。物質的な面では、鞠を「干す」意味があったのだろう。前出の『松下十巻抄』に「鞠ほす事」という項があり、「ざうさなく木に付候てほす事わろく候。鞠箱のふたなどに入候てほし候べく候。」とされ、腰夾にもそうした用途があったと考えられる。また「ほし所、まり庭のうちは何たる所も不苦」とし、「又かい(公界)にほすとも、鞠の置やうなどさのみ有がたし。」という。干し方に特に決った作法はなかったようであるが、軒先は適当な場所なのだろう。

単に都合がよいというだけでなく、腰夾自体が華美化するように、装飾的な意味合いも考えられよう。『職人風俗絵巻』の場合に至っては、店の看板となっている。『慕帰絵』の場合、画面の町屋門前へと視野を広げると、鳥籠を持つ坊主、独楽回しに興ずる子どもたち、のぞきこむ母子(子守りと子)といった人々とともに描かれており、屋敷の主人の性格を暗示するものになる。風流な遊び人といった趣である(あるいは、和歌・連歌的な連想による含意があるのかもしれない)さらにこの段の画面全体に戻れば、路上には様々なスタイルの宗教的实践が描かれ、それらと主人公・覚如の親鸞追慕との対比が意図されているように思われる。

このように、細部にまで名前を付けるような読解を試みたうえで、そこからひとまとまりの部分なり、画面全体へと立ち戻ってゆくと、図像や場面の備えていた含意の理解につながる。細部が何を描こうとしているかを確認してゆくことは、絵画作品に接する幅広い学問分野にとって有効な方法であり、『絵引』をこれからも読み込んでゆかねばならないのである。

〔付記〕

本稿は、2006年7月21日、第1班公開研究会に『『絵巻物による日本常民生活絵引』と中世史研究 『絵引』の遺産継承の観点から』と題して報告した内容の一部である。席上ご意見を頂戴した各位にこの場を借りて御礼申し上げたい。

『職人風俗絵巻』(国立歴史民俗博物館蔵・写真提供)より



図版2



図版1

『新版 絵巻物による日本常民生活絵引』第5巻より



図版3

上杉本『洛中洛外図屏風』(米沢市上杉博物館蔵・写真提供) 上京隻第三扇より



東京の都市景観についての一考察

陳 穎恩 (香港大学日本文化研究学系・現代日本経済史専攻院生) CHAN Wing Yan

都市の規模と形態の多くは長期にわたって育成、発展し、歴史的、文化的、経済的な意味が含まれている。

東京は徳川幕府が創立された1603年以降、政治の中心として成長してきた。明治維新(1868年)によって天皇が東京に移り、日本の首都となつてから、政治、商業、金融、教育とマスメディアなどの諸機能を一心に集めた核心的な役割を担う大都市に徐々に変身してきた。東京は1923年の関東大震災、第二次世界大戦中1945年夏の空襲によって破滅的な打撃を受けたが、現在それらの被害を全く感じさせない。

観光客にとって東京のもっとも魅力的なところは、その都市としての多様性にある。アメリカ占領軍の歴史学者セオドア・コーエンはその著作“the Third Turn: MacArthur, the Americans and the rebirth of Japan”(大前正臣訳『日本占領革命:GHQからの証言』上・下、TBSブリタニカ、1983年)で、日本は歴史上三回、その方向性を明らかに変えた大きな転機を経験してきたと述べている。彼の意見は以下のよう整理されるだろう。

初めの転機は7~8世紀に起こり、中国の文化、宗教、文学と文字システムが日本に導入された。第二回目は幕末・明治時代であり、国家安全に対する西洋の脅威に対応するために、政治、軍事、経済と法律などの諸分野において欧米的な制度にあわせて改革が行われた。明治維新の成果は、第一次世界大戦(1914~1918)の日本の勝利によって、世界に示された。第三回目は日本が第二次世界大戦(1937~1945)に負けた時であった。1945~1952年、日本はアメリカが指導する連合国最高司令部の軍事占拠のもとに置かれていた。このGHQ占拠時代に、非軍事化、非独占化、民主化を目指す徹底的な戦後改革が推進されていた。

これらの驚くべき転機の結果は、想像以上である。今日の日本の歴史は第二次大戦後のそれより人を驚かせている。人々は東京の都市景観から、日本史上のこれら重要な転機を見て取れるだろう。歴史的にみれば、東京の都市景観は西洋文化への積極的同化を見せていながら、古くからの伝統を守っている。日本の神社と寺院は世界的にも有名な宗教的大建造物であり、日本の習慣と宗教を反映している。日

本式と西洋式の両方の庭園を持ち合わせた上野公園、新宿御苑、日比谷公園、北の丸公園など、緑地の存在も都市景観のもう一つの特色である。

東京の都市景観の歴史的变化を考察するにあたり、産業地区の発達を無視できない。明治、大正時代から始まった産業化は産業地区を誕生させた。現代史において産業地区は、日本経済の奇跡を育て、商品製造から商品の研究開発へと日本経済が変化していく姿を見守ってきた。

21世紀初めの今日において、全ての大都市はその歴史的な転換期にあるように見える。東京は世界の最も重要な情報都市のひとつとして発展した。発達した鉄道と高速道路網が四方に走り、整備されたインフラと様々な建物が多種多様な都市景観を生み出している。東京の心臓部はビジネスの中心地千代田区と、行政機関や商業ビルが密集する新宿であり、大型ショッピングモールや各種文化遺産、歴史建築、緑地は東京の至る所で密集している。東京の景観は、東京や品川駅周辺のように発展が鈍化した古い地域は補修、再活性化され、お台場地区のような再開発プロジェクトによって活性化している。東京の成功は、林立する高層ビルのような、新しく建設されたハードウェアやインフラによるだけではなく、歴史、文化、多様性などソフトウェアにも支えられている。

筆者は、神奈川大学21世紀COEプログラムの招聘により、訪問研究員として東京都市景観と近代歴史文化というテーマを携え、約二週間日本で調査を行った。今回の訪問により、私は日本経済を歴史的、文化的背景から理解を深めることができた。この素晴らしい機会を提供して下さった神奈川大学21世紀COEプログラムに対して心より感謝の意を表したい。(陳穎恩氏は2005年12月5日~12月18日訪問研究員として来日。)



東京タワーからみた新宿ビル群



増上寺と東京タワー

少女の絵姿から見た日本の「東西融合」

戴 嵐（華東師範大学民俗学専攻博士生） DAI Lan

非文字資料の重要な一部として、図像は日常生活の場面を固定し保存する役割を果たしている。時間序列に従い、各時期の図像を集めてみると歴史の流れの中における生活や教育、それらの図像に潜むある種の情緒の変化が現れてくると思われる。少女の絵姿の変化から、日本と西洋の文化の要素が有機的に融合しているのが見える。

日本の少女の可愛らしさや純情などの東洋の伝統的な審美的特徴は、図像に表現されていると思われる。二週間の現地調査で、博物館の展示品から印刷物や街角の広告まで、昔の浮世絵から現代生活の中の漫画まで実例を探し、少女の絵姿が変化してきた大概の様子が少し分かった。1876年から明治政府によって、幼稚園が設立され、女性教育を充実させ、女性を良妻賢母に育てようとした。その良妻賢母のイメージは、唐の時代からの儒家思想と西洋文化が融合した結果と思われる。図1（1906年の『少女界』第5巻第1号の表紙）に描かれている少女から、このような女性教育の観念が見られる。可愛らしい丸顔の少女らは、着物を身に纏い下駄を履いて遊ぶ場面から、良妻賢母の伝統女性教育理念のモデルが浮かんでくる。少女が琴棋書画や、園芸、割烹などを習得する場面も、絵や双六などに頻りに登場している。

20世紀50年代から、少女の絵姿に、現在の漫画に描かれている少女のような顔がよく見られるようになった（例えば、50年代の手塚治虫の少女をテーマとした漫画）1978年の『少女週刊』の表紙に描かれた少女は、



図1



図2

口が小さいのを除くと、東洋的審美が見られない現在の最もポピュラーな少女イメージ 魔法能力を持ち、姿が美

しく、目が大きく輝き、ミニスカートを穿き、足が細く長いという共通した特徴を持つ は少女たちを虜にしている。街角の様々な広告に使われる少女の画像も、ほとんどこのような姿である。大正時代からの幼児教育では、欧米の新しい教育思想を取り入れ、個性や自発性、自主性を追求するようになった。その結果は現在の少女の絵姿にも窺えると思う。色とりどりの髪、活発で賢く、俗世に超然としている少女のイメージの特徴が段々見えてきた。こうしたファッションへの追求にも、西洋的な審美趣味への意識的な模倣と受容が潜んでいると考えられる。

少女の絵姿は、時代の変容と審美的傾向の変化を記録する役割を果たしてきたと思われる。伝統と現代、東洋と西洋の要素がこれらの「非文字」資料に有機的に融合されている。現在、商品化された娯楽文化の中で、視覚文化の多くは現実を超えた幻想性を持っている一方、ある程度本土的要素（服飾の特徴や髪形など）を保っている。人物の顔の同一化、互いの模倣やコピーは、日本の東西融合のテクニクと影響力を反映している。非文字資料の価値から見れば、これらの図像は、その年代の日本における、ある情緒を表しているのではないと思われる。

日本の少女の絵姿は東洋と西洋の顔の特徴を曖昧にし、ある程度東洋的審美趣味を保ちつつ、西洋的特徴を取り入れ、異国的な雰囲気や漂わせ、真実と幻想が混じっている中間効果を作り出した。「マンガ革命」がアメリカを席卷したことは、日本における東西融合の実践のもう一つの成功であることを、ある側面から証明したのであろう。

（戴嵐氏は2006年7月6日～7月19日訪問研究員として来日。）

- (1) ここで議論したい「少女」とは、現在流行っている少女漫画の中の、性的特徴が鮮明な思春期の少女及びその恋愛を題材とした図像ではなく、年齢から言えば、むしろ「女童」に近いものである。
- (2) 「Manga Revolution」とは、2005年6月に、ニューヨークで行われた図書展示会で、Tokyopop社が使用したスローガンである。2005年8月30日の「中華読書報」の国際セクションは、アメリカでのマンガの勢いについて紹介した。その紹介によると、英語バージョンのマンガはまだ完全に土着化されていなく、明らかな日本出版物の特徴を持っている 5×7インチの小型本で、右開きである。これは出版社の商業手段であるが、ある側面からみれば、日本は東西文化を融合させながら、自分の文化も保っていくという特徴を反映しているのではないと思われる。



主な研究活動

(2006年9月～12月実施分)

研究推進会議

- 第6回 9月27日・COE教員人事、COEプログラムの最終研究成果取りまとめ、COE終了後の事業継続・発展計画について 他
- 第7回 10月11日・平成18年度研究拠点形成費補助金の追加配分申請、海外提携研究機関からの訪問研究員の受入れについて 他
- 第8回 10月25日・本年度外部評価委員及び評価日程、海外提携研究機関からの訪問研究員の受け入れ、5年目の研究成果論文集刊行について 他
- 第9回 11月15日・平成18年度研究拠点形成費補助金の交付申請（追加配分）2007年度予算編成の考え方について 他
- 第10回 11月29日・COE終了後の事業継承・発展計画、本年度外部評価委員および日程、第3回国際シンポジウム実施委員会委員について 他
- 第11回 12月20日・COE研究員(PD)人事、来年度事業推進担当者・運営組織、来年度研究計画・予算について 他

全体会議

- 第3回 9月29日・COEプログラムの最終研究成果取りまとめ、COE終了後の事業継続・発展計画について 他
- 第4回 11月10日・COE終了後の事業継続・発展計画、5年目の研究成果論文集刊行、ニューズレター14号編集案について 他
- 第5回 12月22日・来年度事業推進担当者・運営組織・予算編成の基本的考え方、COE終了後の事業継続・発展計画について 他

研究会

全 体

- 第3回 9月29日・山口 建治 「衾いの身体技法と人形」
・夏 宇継 「東巴求寿儀礼について」
・廣田 律子 「モーションキャプチャを応用した芸能比較研究」
- 第4回 11月10日・君 康道・前田 禎彦
「マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』編纂の現状と問題点」
- 第5回 12月22日・香月 洋一郎 「手段としての写真「澁澤写真」の追跡調査から」

班(課題)

* 課題名の表記は略称です

- 9月5日・5班「実験展示」 研究会
- 9月6日・1班「『東アジア生活絵引』編纂」 研究会
- 9月21日・1班「『東アジア生活絵引』編纂」 研究会
- 9月22日・6班「理論総括研究」 研究会
香月 洋一郎・八久保 厚志 「これまでの3班の作業と分解後の動向」



主な研究活動

- 10月4日・1班「マルチ言語版『絵引』編纂」校閲作業 10月6日・5班「実験展示」研究会
 10月13日・3班「環境認識とその変遷」研究会（本誌29頁参照）
 田 鳳熙（ソウル大学校工科大学副教授）「韓国の多島海を写した「澁澤写真」について」
 10月17日・1班「『東アジア生活絵引』編纂」研究会
 10月18日・1班「マルチ言語版『絵引』編纂」校閲作業
 10月23日・5班「実験展示」公開研究会
 村井 良子（プランニング・ラボ代表取締役）「展示評価をめぐって」
 11月1日・1班「マルチ言語版『絵引』編纂」校閲作業 11月6日・5班「実験展示」研究会
 11月15日・1班「マルチ言語版『絵引』編纂」校閲作業 11月17日・6班「理論総括研究」研究会
 11月18日・1班「『東アジア生活絵引』編纂」研究会
 11月21日・5班「実験展示」研究会 「高度専門職学芸員養成プログラムの策定について」
 11月29日・4班「地域統合情報発信班」打合せ 12月6日・2班会議
 12月15日・1班「『東アジア生活絵引』編纂」公開研究会（本誌裏表紙参照）
 小川 陽一（東北大学名誉教授）「明清期の生活文化図像資料としての善書 とくに『太上感應篇図説』」
 12月16日・1班「『近世・近代生活絵引』編纂」公開研究会（本誌裏表紙参照）
 「人びとの暮らしと生業 『日本近世生活絵引』作成への問題点をさぐる」
 菊池 勇夫 「菅江真澄がみたコタンの景観」、田島 佳也 「土屋又三郎『農業図絵』に描かれた城
 下金沢と近郊村に生活する人びと」「江差浜における鯨漁と加工に勤しむ人びと 『江差浜鯨漁之図』から」
 12月18日・5班「実験展示」研究会 12月26日・1班「『東アジア生活絵引』編纂」研究会

現地調査

北原 糸子	中国 青島（9月3日～6日）
第2回国際シンポジウムにおいて青島の租界跡などの対象地を総合的に理解するための現地調査	
山口 建治	中国 浙江省温州市・泰順県他（9月3日～11日）
泰順県文博館等において木偶祭祀調査	
菊池 勇夫	北海道有珠、虻田（9月12日～14日）
有珠善光寺・有珠郷土館・虻田郷土資料館およびその周辺などにおいて、江戸期有珠・虻田辺の絵図情報の巡見調査 建物・地名・馬牧等の場所の確認	
的場 昭弘	フランス パリ・リヨン（9月13日～20日）
INP, Institut d'Asie Orientale, Le Havre市立美術館、Musée du quai において理論班の理論総括のためにフランス博物館調査、および聞き取り調査。リヨン大学東アジア研究所のリュ氏と国際シンポジウムの打合せ	
河野 通明	静岡県東部（9月14日～17日）
御殿場市、沼津市などの資料館において、非文字資料の体系化のための在来農具の比較調査	
佐野 賢治、橘川 俊忠、木下 宏揚	福島県南会津郡只見町（9月15日～16日）
只見町教育委員会において只見町民具カードデジタルデータ化のための入力作業の実施	
榎 美香	石川県金沢市、滋賀県草津市（9月21日～23日）
金沢21世紀美術館および滋賀県立琵琶湖博物館において博物館の先進的展示に関する調査	



主な研究活動

福田 アジオ、中村 ひろ子	大坂府吹田市（9月23日～24日）
国立民族学博物館において、実験展示にかかわるシンポジウム「ユニバーサル・ミュージアムを考える」に参加のため	
河野 通明	長野県、山梨県（9月29日）
原村教育委員会、南アルプス市教育委員会において非文字資料の体系化のための在来農具の比較調査	
青木 俊也	滋賀県草津市（10月8日）
滋賀県立琵琶湖博物館において実験展示班の展示調査	
橘川 俊忠	福島県只見町、秋田県田沢湖町（10月11日～14日）
COE地域統合情報発信のための情報および資料収集・作成のため	
廣田 律子	秋田県田沢湖町（10月13日）
わらび座デジタルファクトリーにおいて只見町芸能収集のため	
河野 通明	愛知県長久手町（10月19日）
愛知県農業総合試験場において、非文字資料の体系化のための在来農具の比較調査	
香月 洋一郎	鹿児島県大島郡喜界町（10月24日～28日）
喜界町教育委員会および阿伝集落の公民館において、「澁澤写真」喜界島分の追跡調査、および発表にむけての地元との合意確認	
福田 アジオ、田上 繁、中村 ひろ子、浜田 弘明、丸山 泰明（PD）	神奈川県横浜市（11月10日）
鶴見大学大学院（文化財学専攻）における高度専門職学芸員養成プログラムのための調査	
福田 アジオ、佐野 賢治、橘川 俊忠、河野 通明、佐々木 長生	福島県南会津郡只見町（11月11日～13日）
只見町シンポジウム「民具は世界を結ぶ」に参加のため	
香月 洋一郎	鹿児島県大島郡喜界町（11月12日～14日）
10月の調査に引き続き、喜界町阿伝集落を中心とした地域での「澁澤写真」の喜界島分の追跡調査	
刈田 均	福岡県太宰府市・長崎県長崎市（11月16日～17日）
九州国立博物館・長崎県歴史文化博物館において実験展示の参考のための現地調査	
福田 アジオ、鈴木 陽一、金 貞我、王 京（RA） 彭 偉文（RA）	中国江蘇省蘇州市（11月23日～28日）
第1班第3課題「『東アジア生活絵引』編纂」のための現地調査	
香月 洋一郎	神奈川県小田原市（12月3日）
作業班「景観の認識とその変遷の研究」で鎌倉の調査を行っており、北条氏の旧城下との事例比較のための現地調査	
中村 ひろ子、青木 俊也、丸山 泰明（PD）	広島県福山市（12月23日～24日）
日本はきもの博物館、広島県立歴史博物館において実験展示のための先進展示の調査	
田島 佳也	石川県金沢市（12月25日～27日）
石川県立図書館、石川県立歴史博物館、近世史料館（旧玉川図書館）において『農業図絵』（絵引作成資料）の記載内容確認と補充情報の収集	

「景観の時系列的研究」作業班 公開研究会報告

2006年10月13日 於COE共同研究室

韓国の多島海を写した「澁澤写真」について

田 鳳熙（ソウル大学校工科大学建築学科 副教授） JEON Bong Hee

本作業班の富井正憲先生の御紹介によりソウル大学から田鳳熙先生をお招きして研究会を行った。田先生には研究会当日の午前中に「澁澤写真」を見ていただき、午後、それにもとづいての、また韓国での写真資料の保存状況の紹介などを盛り込んでの御報告をお願いした。その記録のとりまとめは神奈川大学建築学科在籍の大学院生、千葉神奈子が行ったが、その分量は極めて多く、ここではその一部を香月洋一郎が抄出して研究会の一端を紹介することにした。

澁澤敬三と澁澤写真について

- ・午前中見た写真（150～200枚）のうち85%は多島海のものだったが、蔚山の全般的な調査の写真もあった。
- ・これはいろいろな人たちが参加して調査を行ったようで、京城帝国大学の学生たちと医師も連れていっている。「澁澤写真」の陳列物の写真はソウル大にもある。このことから、澁澤は陳列館を訪れたと思われる。
- ・多島海の覚え書きは秋葉隆先生（京城帝国大、巫俗：シャーマニズムを研究、東京帝国大発表「朝鮮の巫俗に関する研究」）が書いているところもある。秋葉は澁澤とつながりがある。秋葉は1930年後半～1940年前半にかけて韓国全羅道農村地区の調査をしている。なお、多島海という言葉は、現在使われている意味と韓国で使われている意味（南海を指す）とでは異なっている。

韓国の今の状態について

- ・神奈川大でも研究されている非文字資料の体系化については、韓国でも関心をもたれている。
- ・韓国では画像資料の記録物の所蔵は1910年を基点として分かれている。1905年から日本の支配が始まったが、1910年までは大韓帝国の時代であった。1910年を始点として資料保存の変化がはじまった。公式的な記録は、1910年までのものは奎章閣（ソウル大）に、1910年からのものは総督府に保管されていた。
- ・現在1910年以降で王室関係のものは、蔵書閣（韓国学中央研究院）に保管されている。朝鮮総督府の持っていたものは、現在国家記録院が持っている。近代の資料は、総督府図書館から韓国中央図書館へ、京城府図書館からソウル市立南山図書館へと移された。
- ・私（田）は2000年～2003年まで国家記録院（政府記録保存所）の建築図面をアーカイブ化するプロジェクトに参加していた。国家記録院には22,000枚くらいの図面があった。このうちの95%は1925年以降に撮影されたもの。1910年～1925年の図面は殆どない。1910年以前のは奎章閣にある。また、2005年～2006年にはソウル大奎章閣の図面をアーカイブ化するプロジェクトにも参加していた。奎章閣には近代式の図面、180枚くらいがあった。その殆どは非公開。見ることはできるが、学者が興味を持って研究することはなかった。
- ・1910年～1925年の建築図面はない。この理由はいくつか推測することが出来るが、国家記録院には保存期限があることから、その保存期限を過ぎたことが図面のない理由としてあげられる。1925年までに作られたものは1945年より前のある時期に期限がきて捨てられた。1945年に開放されて、そのときに保存期限内だったものは総督府に記録として残っている。1945年以後のものは旧文書として記録保存所に保存期限なしで倉庫に保管されている。
- ・こうした点に関心が高まったのは、1995年に金泳三大統領が総督府の建物を壊したことがきっかけとなっている。そのとき朝鮮総督府から図面が見つかった。

写真のこと

- ・韓国では1900年からの写真資料が存在しており、およそ9分野の写真アーカイブが公開されている。
- ・現在ソウル大では1302点のガラス原板が公開されている。2002年7月～2003年6月にその整理事業が行なわれた。2006年6月に最終報告書を出し、本年末には図版書を出版予定である。（配布レジュメの資料は2004年4月～6月にソウル大博物館での展覧会の時のもの。展覧会タイトルは「彼らの視点から見た近代」（オリエンタリズム））
- ・ガラス原板には秋葉隆、赤松智城が関係したと思われる。共に民俗学、宗教学の研究者である。そのため、民俗学の分野のものが多い。これは澁澤フィルムに似ている。ソウル大には大谷光瑞と関係したのものもある。大谷探検隊が持ってきた壁画も中央博物館にある。ガラス原板は民族文化のものが450枚、遺蹟のものが213枚、満州・蒙古（満州地域）のものが115枚ある。満州地域は京城大学の先生が調査している。



受贈資料一覧（書籍・雑誌）

（2006年9月～11月）

タイトル	発行所
『F-GENSジャーナル』No.6 公募研究特集号	お茶の水女子大学21世紀COEプログラム 「ジェンダー研究のフロンティア」
研究雑誌「先端社会研究」No.4	関西学院大学21世紀COEプログラム 「『人類の幸福に資する社会調査』の研究 文化的多様性を尊重する社会の構築」
ニュースレター No.13	京都大学大学院法学研究科21世紀COEプログラム 「多文化社会における社会統合とナショナル・アイデンティティ」
『FRONTIER NEWS』No.14	京都薬科大学21世紀COEプログラム 「伝承からプロテオームまでの統合創薬の開拓」
ニュースレター No.7	近畿大学21世紀COEプログラム 「クロマグロ等の魚類養殖産業支援型研究拠点」
欧文紀要 No.6	慶應義塾大学21世紀COEプログラム 「多文化多世代交差世界の政治社会秩序形成 多文化世界における市民意識の動態」
第4回KU-UW国際シンポジウム報告書	神戸大学21世紀COEプログラム 「安全と共生のための都市空間デザイン戦略」
西谷 修ほか編『グローバル化と奈落の夢』 松本 脩作編著『インド書誌』 二木 博史ほか編著 『Landscapes Reflected in Old Mongolian Maps』	東京外国語大学大学院地域文化研究科 21世紀COEプログラム「史資料ハブ地域文化研究拠点」
言語情報学研究報告11『言語研究におけるコーパス分析と理論の接点』	東京外国語大学21世紀COEプログラム 「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」
ニュースレター No.12～14	東京工業大学21世紀COEプログラム 「インスティテューショナル技術経営学」(SIMOT)
Wind Effects Bulletin No.6 ニュースレター『Wind Effects News』No.12	東京工芸大学工学研究科 風工学研究センター 21世紀COEプログラム 「都市・建築物へのウインド・インフェクト」
成果報告書	東京大学21世紀COEプログラム 「言語から読み解くゲノムと生命システム」
ニュースレター No.9	東京大学21世紀COEプログラム 「心とことば 進化認知科学的展開」
国際ワークショップ報告書『東アジアにおける近代化とナショナル・アイデンティティ』英語版、アラビア語版	同志社大学21世紀COEプログラム 「一神教学際研究センター」
報告集 No.7『古代日本の言語文化』 報告集 No.8『若手研究者支援プログラム(1)』 ニュースレター No.8	奈良女子大学21世紀COEプログラム 「古代日本形成の特質解明の研究教育拠点」
ニュースレター No.3	日本福祉大学プロジェクト21世紀COEプログラム 「福祉社会開発の政策科学形成へのアジア拠点」
『中間報告書2006』	日本大学21世紀COEプログラム 「環境適応生物を活用する環境修復技術の開発」
ニュースレター No.10	一橋大学21世紀COEプログラム 「現代経済システムの規範的評価と社会的選択」
第3回国際ワークショップ記録集 『ヒト抗体を用いたインフルエンザの制御は可能か』	藤田保健衛生大学21世紀COEプログラム 「超低侵襲標的化診断治療開発センター」
『ドイツ語圏における日本研究の現状』 『国際日本学研究』第2号 ニュースレター No.4	法政大学21世紀COEプログラム 「日本発信の国際日本学の構築」
『科学技術動向』No.64～67	文部科学省科学技術政策研究所 科学技術動向研究センター

調査研究協力者

本プログラムの調査研究活動を支援していただく今年度のCOE調査研究協力者に、追加委嘱された方々です。

2006年12月現在

氏名	所属部局・職名
山本 志乃 YAMAMOTO Shino	旅の文化研究所 研究員
富澤 達三 TOMIZAWA Tatsuzo	中央区教育委員会社会教育課郷土天文館 文化財調査指導員
マクレリー ルシ サウス McCREERY Ruth South	有限会社 ザ・ワード・ワークス
堀内 寛晃 HORIUCHI Hiroaki	神奈川大学大学院工学研究科博士前期課程修了
藤永 豪 FUJINAGA Go	佐賀大学文化教育学部 専任講師
韓 東洙 HAN Dong Soo	漢陽大学校建築大学 教授
尹 賢鎮 YOON Hyun-jin	延世大学校中央博物館 学芸員
中野 泰 NAKANO Yasushi	筑波大学大学院人文社会科学研究科 専任講師

2006年度 海外提携研究機関の訪問研究員・派遣研究員

本プログラムより派遣・招聘される若手研究者は、約2週間をそれぞれの研究課題にそって現地調査を実施します。

訪問研究員

氏名：ベネシュ オレグ BENESCH Oleg
 (ブリティッシュ・コロンビア大学アジア研究専攻博士課程)
 受入れ期間：2006年11月21日～12月4日
 研究課題：1895年～1945年におけるの武士道精神の発達について

氏名：唐沢 ダニエラ KARASAWA Daniela
 (サンパウロ大学大学院日本語・日本文学・日本文化修士課程)
 受入れ期間：2006年12月2日～12月18日
 研究課題：ブラジルにおける日本マンガのローカル化プロセスに関する研究



絵葉書24枚セット (横浜の震災の状況を撮影したもの、昭和初期発行、発行所不詳)



その中の1点「横浜弁天橋より見たる本町方面の惨状」

貴重資料の紹介

貴重資料の紹介
2006年度に購入した資料

編集後記

ニューズレターの編集を担当して3冊目の編集後記です。この時期は、COEの作業に限らず、今年度のまとめに向けての作業と来年度に向けての実務レベルでの諸準備が始まり、なんともせわしない時期で、小さなトラブルでも、生じればその後始末にかかる手間や時間は、いつもより余計にふくれます。スムーズにことが運んでいけばそれはそれで、逆になにか見落としがあるのでは、と不安になります。今号も誤植、校正ミスなどが無いことを祈りつつ。(香月)

本学COE関係者にとって今年度最大のヤマ場であった第2回国際シンポジウムが無事終了しました。2回目ということもあり、昨年比べると比較的余裕をもってのぞむことができたと思います。ほっとしたのも束の間、残り少なくなった今年度の最後には、報告書、年報の作成という課題も山積みですが...(関)

COE

2007年3月末刊行予定で下記の報告書を作成中。

年報第4号

『人類文化研究のための非文字資料の体系化』

調査研究資料4号

『手段としての写真「澁澤写真」の追跡調査から』(仮題)

シンポジウム報告

『歴史災害と都市 京都・東京を中心に』

2006年8月に立命館大学COEと共催したワークショップの報告書です。

シンポジウム報告

『図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く』

2006年10月に開催した第2回国際シンポジウムの報告書です。

研究成果報告書

『マルチ言語版『日本常民生活絵引』』第2巻

研究会の開催

1班『東アジア生活絵引』編纂」公開研究会

『明清期の生活文化図像資料としての善書
とくに『太上感應篇図説』』

日時：2006年12月15日(金) 16:30～18:00

会場：神奈川大学横浜キャンパス21号館405室

講師：小川陽一(東北大学名誉教授)

1班『近世・近代生活絵引』編纂」公開研究会

『人びとの暮らしと生業
『日本近世生活絵引』作成への問題点をさぐる』

日時：2006年12月16日(土) 13:30～17:00

会場：神奈川大学横浜キャンパス21号館405室

報告：

菊池勇夫「菅江真澄がみたコタンの景観」

コメンテーター：児島恭子(早稲田大学講師)

舟山直治(北海道開拓記念館学芸員)

田島佳也「土屋又三郎『農業図絵』に描かれた城下金

沢と近郊村に生活する人びと」

「江差浜における鯨漁と加工に勤しむ人びと」

『江差浜鯨漁之図』から」

コメンテーター：長島淳子(早稲田大学講師)・舟山直治

討論 『日本近世生活絵引』作成の諸問題について



日本常民文化研究所

Institute for the Study of Japanese Folk Culture

2007年3月末刊行予定で下記の報告書を作成中。

神奈川大学日本常民文化研究所論集

『歴史と民俗』23

2006年10月25日から12月15日まで企画展「巻物の伝える世界 職人・由緒・儀礼」を開催しました。(本誌7頁参照)また、この企画展に関連して、第10回常民文化研究講座「職人巻物 書承と口承の交錯」が2006年11月25日に開催され、盛況のうちに終了しました。

歴史民俗資料学研究科

Graduate School of History and Folklore Studies

2007年3月末刊行予定で下記の報告書を作成中。

『歴史民俗資料学研究』第12号

神奈川大学歴史調査報告第4集

『渋江公昭家文書目録』(2)

外国語学研究科 中国言語文化専攻

The Course of Chinese Language and Culture,
Graduate School of Foreign Languages

『中国における日本租界研究』ワークショップ

日時：2007年3月2日(金) 13:00～17:00

会場：神奈川大学横浜キャンパス1号館804室

プログラム(予定)：1.「台湾国史館の日本租界関連資料から読み取れること」大里浩秋、2.「漢口の日本租界をめぐる日中の攻防」孫安石、3.「上海の在華紡の住宅調査報告」富井正憲、4.「在華紡の福祉施設 内外綿上海工場の事例」芦沢千絵、5.「中国における最近の租界研究動向」陳祖恩、6.「横浜住民からみた居留地の外国人」齊藤多喜夫(司会：吉井蒼生夫、コメンテーター：川島真、貴志俊彦、村井寛志)

共催：神奈川大学21世紀COEプログラム第3班・租界研究グループ、神奈川大学共同研究助成「戦前中国・朝鮮における日本租界の研究」

詳細は<http://human.kanagawa-u.ac.jp/kenkyu/group/nittsu/>に掲載します。

各研究所・研究科 問合せ

刊行物や催し物については該当する各所にお問合せください。

045-481-5661(代)

日本常民文化研究所(内線4358) 歴史民俗資料学研究科(内線4024)
中国語共同研究室(内線4525) COE支援事務室(内線3532)

非文字資料研究 No.14

発行日 第14号 2006年12月31日発行

編集・発行 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議

The Center of Kanagawa University 21st Century COE Program

Systematization of Nonwritten Cultural Materials for the Study of Human Societies

〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1

Tel.045-481-5661 Fax.045-491-0659 URL <http://www.himoji.jp/>

